

〔共同研究〕

室町期における諸宗兼学仏教の研究（七）

— 澄円『浄土十勝論』の翻刻・書き下し文・語注 —

室町期における諸宗兼学仏教研究会

はじめに

本研究会では、室町期の仏教研究において従来あまり注目されていない諸宗兼学・融合思想を有した仏教者旭蓮社澄円（一二九〇—一三七二）に着目し、著書『浄土十勝箋節論』（以下、『浄土十勝論』）十五卷ならびに『同輔助義』四卷を取りあげて、浄土学・真言学の研究者を中心に研究を行っている。

具体的には、これまで一度も活字化されていない『浄土十勝論』『同輔助義』の翻刻・書き下し文・語注の作成を中心に行っている。また、澄円とその著作に関する個人研究を翻刻作業等と並行して行っている。

今年度の共同研究については、巻上乾上の十五丁ウラ六行目から巻尾までの翻刻篇（諸本と対校・校訂本の作成）と訳注篇（書き下し及び語注の作成）の作業を終了した。また、個人研究については、平成二十七年の佛教文化学会において、大橋雄人研究員が「澄円『浄土十勝論』の講義について」というテーマで発表を行った。

次年度も共同研究において引き続き翻刻ならびに書き下し、語注の作業を行う予定である。また、個人研究も計画的に進めていきたいと考えている。

凡例

① 本編は『浄土十勝論』の卷上乾上の十五丁ウラ六行目から卷尾まで、嘉永五年刊本（文久四年再版）を底本として翻刻・書き下し・語注を施したものである。対校本には、寛文三年刊本を用いた。なお、嘉永五年刊本には的門等による現存しない写本を用いた校訂の成果が残されており、適宜これも参照した。

② 校合に用いた諸本、及びその略称・略号は左の通りである。

当研究会所蔵・嘉永五年刊本（文久四年再版）…嘉永本 ↓◎（本篇における底本）

大正大学所蔵・寛文三年刊本…寛文本 ↓①

嘉永本校訂に使用された灯誉膳写本…古本 ↓②

③ 翻刻の際に読みやすさを考えて「。」を付した。

④ 丁末に嘉永本の丁数を付した。

⑤ 校合した各本の異同は脚注にて示した。

⑥ 読みは基本◎の送りを優先したが、適宜①を参照して訂正した。

⑦ 誤字は訂正せず、傍に「ママ」と付した。

【翻刻】（章目・三学無分勝第一）

又宝王

論云十住婆沙論并龍樹菩薩造积華嚴經論易行

品云。菩薩道有難行行。如陸地乘舟也。有易行行如

水路乘舟也。阿弥陀仏本願之力若人聞名称念自

帰彼国。如舟得水又遇便風一挙千里。不亦易哉^{上巳}。

（卷上乾上 一五丁ウ）

大凡二道高卑等具出西祖^{馬鳴、龍樹、東師等衆賢等}

高判。文繁故於是不載。欲知者之而看焉^{（3）}。如何難行^{（4）}。

非願故難行也。如何非願^{（5）}。自力故非願也。如何自力^{（6）}。

式内故自力也。如何式内^{（7）}。難証故式内也。如何難証^{（8）}。

（1）沙娑^{（1）}

（2）賢+（矣）^{（1）}

（3）看+（矣）^{（1）}

（4）如何胡也^{（1）}

（5）如何何也^{（1）}

（6）如何且焉矣^{（1）}

（7）如何焉奈也^{（1）}

（8）如何何也^{（1）}

聖道故難証也。如何聖道^{（9）}。断証故聖道也。如何断証^{（10）}。

漸成故断証也。如何漸成^{（11）}。非頓教故漸成也。如何非

頓教。權教故非頓教也。如何權教^{（12）}。非本懷故權教也。

權教故非頓教。非頓教故漸成。漸成故断証。断証故

聖道。聖道故難証。難証故式内。式内故自力。自力故

非願。非願故難行也。又如何易行^{（13）}。本願故易行也。如

（卷上乾上 一六丁才）

何本願^{（14）}。他力故本願也。如何他力^{（15）}。格外故他力也。如

何格外^{（16）}。易証故格外也。如何易証^{（17）}。往生故易証也。如

（9）也如何矣焉胡且^{（1）}

（10）也如何何也^{（1）}

（11）也如何何也^{（1）}

（12）如何何夫^{（1）}

（13）如何焉与^{（1）}

（14）如何胡^{（1）}

（15）如何何也^{（1）}

（16）如何焉矣^{（1）}

（17）也如何且奈^{（1）}

（18）如何何矣^{（1）}

何往生。¹⁹ 頓撰故往生也。如何頓撰。²⁰ 頓教故頓撰也。如何頓教。實教故頓教也。如何實教。²¹ 本懷故實教也。實教故頓教。頓教故頓撰。頓撰故往生。往生故易証。易証故格外。格外故他力。他力故本願。本願故易行也。²² 智人商量焉²³智人商量焉²⁴。夫自力難行修者叵透徹覺城譬如望于一品經于及第太巨遂矣。他力易行持者易往詣淨利猶似任乎一官受乎廩官尤易得也。²⁵ 一切信男信女等忘早拋難得落第諸行修易得

(卷上乾上 一六丁ウ)

受廩淨土而已。請問之。曰夫三学分外之得脱者是三部四軸往生之誠說也。逆誘犯重之往生者乃五

- (19) 也如何〓矣胡也 ①
(20) 如何〓何矣 ①
(21) 如何〓奈何 ①
(22) 也〓矣 ①
(23) (焉) ①になし
(24) 焉〓矣 ①
(25) (也) ①になし

部九卷処²⁶之定判也²⁷学者自知之矣²⁸。抑於当今末法之時者羊鹿白牛已斃而飛輅独運焉²⁹於渾濁造惡之世者一三法船忽沈而願船特渡焉³¹。行人豈容不欣慶之哉。有識高智之道人等応当早出三学難行之域闢而入九品易行之妙門也。夫以掇瓠捨櫓是自力泥滯之人廢乎淨教之謂乎。玄莊疏云不附世情故大言不合於里耳也³²已上。又曇鸞論註云非常之言不入常人之耳³³已上。為樽樹樹乃宿善熏芳之冀

(卷上乾上 一七丁才)

執乎真宗之謂乎³⁴。經云曾更見世尊則能信此事。謙敬聞奉行踊躍大歡喜³⁵已上。智人商量焉乎哉也。余視

- (26) 処処〓処々 ①
(27) 也〓矣 ①
(28) (之) ①になし
(29) 矣+(乎) ①
(30) 焉〓矣 ①
(31) 焉〓矣 ①
(32) (人) ①になし
(33) 註〓注 ①
(34) 乎〓矣 ①

臆自力之行者多憂難得難証矣。今教示曰夫畏影

惡迹者宜処陰処靜。憂行歎難者当捨聖掃淨。嗚呼

六賊知聞失此法財過乎愛毒蛇。煩惑千間無生難

期危乎累碁卵也。行者可慎行者可慎。抑八家大乘

學者雖生弘願流行之世而不唱弥陀尊号愁吟我

性難顯者譬如薜荔之臨達池而憂枯渴又似文武

之見明玉而歎夜闇。可憫可憫。又摩尼明月宝珠之

高卑兮梅檀沈水芬芳之淺深兮式内格外解脫之

（卷上乾上 一七丁ウ）

勝劣兮断証横截出離之遲疾兮拔苦有道之智人

二道相對而可知其殿最矣。夫以三密十乘之鈍刀

未斬煩惑之繃。六字一声之利劍速碎業繫之讎。誰

智人可諍之乎。古云医方万品宜選対治。海宝千般

(35) 慎+(矣) ①

(36) 雖||乍 ①

(37) 渴+(矣) ①

(38) 憫+(矣) ①

(39) 芳||芬 ①

(40) 乎||矣 ①

(41) (二六) ①になし

先求如意。若有求解脫之捷徑之人者速出乎三学

式内之闔域早入乎六字格外之妙門。夫修聖道之

諸行猶如盪万仞船筏乎大行之嶮路勤淨土之妙

業宛似飛一葉船舶乎巨瀛波瀾矣。然孰彙是界獲

乎。誰人亦大士也。嗚呼為一簣之山而欲登九仞取

一捻之土欲压千鈞。不其難乎。慎居慎諸。諸方行者

（卷上乾上 一八丁才）

等莫抱甕而出灌。專機棒而潤蔬矣。請問之。曰密行

人之中適有功能行者得脫生死。是則淨刹往生故

尤可謂吾家得分。又設雖有如俱博等功功能成仏之

彙未遁二失。猶是墮難行自力之道。何故然乎。出獄

成仏也何言乎。断蛇覺之妄情生藤覺之実見。名之

証得菩提之故也。故招去聖遙遠理深解微之失而

已。夫以上悉是難行之撰矣中悉廼易行之益矣。若

(42) 勤+(乎) ①

(43) 鈞||鉤 ①

(44) 甕||壘 ①

(45) 博||傳 ①

(46) 乎||且 ①

爾者君莫謂真言功能之勝用超絶淨土真実之巨

益焉。⁽⁴⁷⁾亦円密宗者難之曰式内修行解脱之正因格

外称揚出離之勝業。⁽⁴⁸⁾二道緯異。莫致違諍矣。⁽⁴⁹⁾戒度云

(卷上乾上 一八丁ウ)

淨土法門大異常途。但作願求即得超往^上。文選云

陶匏異品並為入耳之娛。黼黻不同俱為悅目翫^已。

又賁鼓密含響竜笛透發音。豈云不爾諸。但六大四

曼之慧灯光幽而二種生死之大夜未曙^{時約}。止觀上

乘之智水潤涸而三妄五住之高原尚堅^{機約}。高識深

智之道人等商量焉思⁽⁵⁰⁾。抑於当今末法之時雖

欲得聖道之行果行果難可得。譬如緣木求魚升山

採珠亦似樹荷山上畜火井中。豈容得尅果哉。於末

代惡世之中善療二死之重療只是弥陀尊号之靈

藥而已。雖然人弗服餌之故多病生死之重病矣。古

(47) 焉+ (矣) ①

(48) (之) ①になし

(49) 矣||与 ①

(50) 焉||矣 ①

(51) 焉||矣 ①

(卷上乾上 一九丁才)

云病家之厨非無嘉饈也。乃其人弗之能食故遂死。

乱国之官非無賢人也。乃其君弗之能用故遂亡^上。

唯願一切衆生急出岐路速趣直道行持名之大善

詣九品之淨刹焉。⁽⁵²⁾秘藏宝鑰云疾有輕重藥則強弱。

障有厚薄教則淺深。增劫病輕輪王御人減劫障厚

如來垂教。五濁惡世衆生病重⁽⁵³⁾三毒鬱興八苦迫身

福德薄少貪病極多。^至乃此生作惡業後当墮三途。三

途之苦經劫難免。如來慈父見此極苦說其因果。說

惡因果拔其極苦示善因果授其極果^上。以之觀之

者化根利障輕之冀是淺教乎。導根鈍障重之輩

(卷上乾上 一九丁ウ)

深法乎。若爾者今此淨土之一宗者能濟五逆八重

之惡輩度三学分外之魯鈍。可謂是最大深厚之洪

(52) 焉||且矣 ①

(53) 病||疾 ①

教也⁽⁵⁴⁾。密行之人難曰夫経歴発心修行証得菩提之階位是偏小權大漸教之次第也。開演発心即到初心即極之秘奥廼円密実大頓行之妙益也。大日経云云何菩提。謂如実知自心⁽⁵⁵⁾。同疏第二云若如实自知即是初発心時便成正覺。譬如長者家窮子若自識父時豈復是客作賤人耶⁽⁵⁶⁾。又云於発意頃便至所詣⁽⁵⁷⁾。秘鍵云迷悟在我則発心即到⁽⁵⁸⁾。若於発心之時則到菩提之果豈容遠待修行証果之時

（卷上乾上 二〇丁才）

乎。若爾者聖道難行之過失唯在偏小權大之修行全不関円密実大之行人者哉何如。答曰此義太早也疎忽也。夫智目行足到清涼地者是四依大聖之決判也。発菩提心修菩薩行者廼円密二教之綱者也。設雖為円密相応之頓機必応有聞信解行証之次第也。譬如神通之人不飛空中而踐地上必経其

(54) 也矣——矣焉 ①

(55) 自十（心） ①②

(56) (若) ①②になし

里数也⁽⁵⁷⁾。又如彼在世得度之人者皆聞經之处而得四乘之勝益。雖然於一座聴法之中必経歴五位也。以何得知者觀一代諸經之会未有歛喜奉行之説文故有当機獲益之一段也。故如来滅後之行人亦

（卷上乾上 二〇丁ウ）

復然矣。所以摩訶止観大意五略判発大心修大行感大果裂大綱帰大処又円人行位定聞信行住莊嚴建立。又摩訶止観第五云復闕匠他。盲跛師徒二俱墮落。瞽蹶夜遊甚可怜愍⁽⁵⁸⁾。不応对上諸人説此止観。夫止観者高尚者高尚。卑劣者卑劣⁽⁵⁹⁾。輔行第五云盲跛等者無解如盲。無行如跛。師既若是。弟子可知。故俱墮落。至乃⁽⁶⁰⁾如盲跛相仮能有遠至。至次瞽蹶者

(57) 也十（焉） ①

(58) 也故——故也 ①

(59) 匠——近 ①

(60) 甚——其 ①

(61) 怜——憐 ①

(62) （不応对上諸人説此止観夫止観者） ①になし

(63) （乃至） ①になし

(64) （乃至） ①になし

無目曰瞽足跛曰蹠。既盲且跛而復夜遊。無解無行

失仏教曰遊無明夜。

⁽⁶⁵⁾ 妙解行高尚者如前有信^上。

釈籤云今言盲而不跛如有行無解。跛而不盲如有

(卷上乾上 二一丁才)

解無行。若解行具足猶如二全^上。金剛般若云善男

子善女人發阿耨多羅三藐三菩提心^上如是住如

是降伏其心^上。同註云阿之言無。耨多羅之言上。三

之言正。藐之言偏。菩提之言知。無者無諸垢染。上者

三界無能比。正者正見也。偏者一切智也。智者知一

切有情皆有仏性但能修行尽得成仏。仏者即是無

上清淨般若波羅蜜也。是以一切善男子善女人若

欲修行⁽⁶⁸⁾ 應知無上菩提道。應知無上清淨般若波羅

蜜多法⁽⁶⁹⁾ 以此降伏其心也^上。又云口説心不行即非。

口説心行即是。心有能所即非。心無能所即是^上。又

(65) (乃至) ①になし

(66) 註注

(67) 智知 ①

(68) 蜜蜜 ①

(69) 蜜蜜 ①

(卷上乾上 二一丁ウ)

云悟無生理息希望心遠離衆生顛倒知見即到波

羅蜜彼岸。永出三塗証無余涅槃也^上。又云深解無

相之理故善契仏意故仏言如是。如是言是印可之

辭也^上。又註金剛經云学人不解如来深意但誦如

来所説教法不了本心。不了本心終不成仏。故言不

可説。口誦心不行即非法。口誦心行了無所得即非

非法^上。牟子曰如其無言五千何述焉。若知而不言

可也。既不能知。又不能言愚人也。故能言不能行国

之師也。能行不能言国之用也。能行能言国之宝也。

三品各有所施。何德之賤乎。唯不能言又不能行是

(卷上乾上 二二丁才)

(70) (蜜) ①になし

(71) 故+(乃至) ①

(72) (也) ①になし

(73) 註注 ①

(74) (故言不可説) ①になし

(75) (即) ①になし

謂賤也⁽⁷⁶⁾上。凡六即七位之階級專是聞信解行証之

次第者哉。又菩提心論云如人貪名官者發求名官

心修理名官行若貪財宝者發求財宝心作經營財

物行。凡人欲為善之与惡皆先標其心而後成其志。

所以求菩提者發菩提心修菩提行。^至乃凡修習瑜伽

觀行人當須具修三密行証悟五相成身義也^上。夫

案本論一部之始末上勸勝義行願三摩地三種菩

提心下教三密瑜伽五相成身之行証。正是真言行

者因根究竟之次第而已。但至所出難之衆文者或

是約有不起于座三摩地現前之頓機而發心已後

（卷上乾上 二二丁ウ）

即於一念一座之中頓具足聞信解行証之五位以

為語矣。超三祇乎一念攝万行乎一善等是也。或又

只歎菩提心之靈德矣。所謂一足迷衢行失千里安

心僻越万行徒設矣。然今值生生難逢三密之大教

發世世難發無上之道心而妙了知信解六大四曼

（76）（謂）①になし

（77）祇＝祇

之体相。此之上於勤修毘盧之大行究竟遮那之境

智之遲速者宜在行者之進退。故歎初發之功力以

云發心則到等也。全不遮有修行証果之次第而已。

或応是因中說果之意也。⁽⁷⁸⁾所謂涅槃經二十七云善

男子譬如有人惡心害母。害已生悔。三業雖善是人

（卷上乾上 二三丁才）

故名地獄人也。何以故。是人定當墮地獄故。是人雖

無地獄陰界諸入猶故得名為地獄人。善男子是故

我於諸經中說。若見有人修行善者名見天人修行

惡者名見地獄。何以故。定受報故。善男子一切衆生

定得阿耨多羅三藐三菩提故。是故我說一切衆生

悉有仏性。一切衆生真実未有三十二相八十種好

上。凡道理成仏之法者必經聞信解行証之五位矣。

智人思忖焉。抑又引秘鍵發心即到之文而備不待

修行唯由發心之功用直到覺王城之誠証大迷解

（78）也＝矣 ①

（79）（於）①になし

（80）見有＝有見 ①

（81）（是故）①になし

釈之大猷以執一句之文言而已。今具勘出文前後

(卷上乾上 二三丁ウ)

以撥却贗徒之執弊焉。⁽⁸²⁾秘鍵云夫仏法非遙。心中即近。真如非外。棄身何求。迷悟在我則発心即到。明暗非他。則信修忽証^上已。夫上云発心即到下云信修忽証。是豈非示発心修行証大菩提之次第哉。學者著眼看取文意矣。凡於此文者全非問者之援拠。正是小子之誠証而已也。抑今小子問君。君已発得云何菩提心如実知自心知一切法皆是仏法等円密之大菩提心故頻旬而曰発心即到与哉。將又自未也只立其教理与耶。若未也而言之者日夜教他宝自無半錢分之嚴誠奚得遁耶。若未発得円密之天心

(卷上乾上 二四丁才)

者速勤他力之要行矣。時密行人服膺而恥慙焉。又或円密行者難曰夫案円密兩宗之行相或云無明塵勞即是菩提或言貪欲即是道患癡亦復然。若依

(82) 焉||矣 ①

之觀⁽⁸³⁾之者不動凡位而当処即果仏也。不仮斷証而直爾是覺体也。又判教道云斷証道不斷者哉。若爾者奚有難行難証之憂哉。答曰有五悔修行之明文有召罪摧罪之印明。豈非是止惡修善滅惑証理之義相耶。⁽⁸⁴⁾金剛頂經云不見好色相者即是罪障。応以釣罪障契⁽⁸⁵⁾釣彼諸罪復以摧破諸罪契而摧破之。又金剛頂經云或有衆生深入邪見不樂正法耽著世

(卷上乾上 二四丁ウ)

間資財飲食信外道天神住顛倒者亦応勸進入此金剛界壇場。為欲拔彼邪見衆生離惡趣故^上已。又撰真実經云若凡夫人修此觀門雖造五逆一闡提等惡業悉皆消滅応時便獲五種三昧^上已。大底登壇灌頂之儀則矣阿遮多擊之脫喝矣皆是禁惡防非之標幟⁽⁸⁷⁾斷惑証理之相貌而已。高識密人応知焉。又法

(83) 之十而 ①
(84) 耶十且 ①
(85) 釣||鉤 ①
(86) 釣||鉤 ①
(87) 標||標 ①

華第一云若人信帰仏如来不欺誑。亦無貪嫉意。断

諸法中惡。故仏於十方而独無所畏^上。同第五云如

来亦復如是。於三界中為大法王以法教化一切衆

生。見賢聖軍与五陰魔煩惱魔死魔共戰有大功勲

（卷上乾上 二五丁才）

滅三毒出三界破魔網爾時如来亦大歡喜。此法華

經能令衆生至一切智^上。註金剛經云滅度者大解

脱也。大解脱者煩惱及習氣一切諸業障滅尽更無

有余是名大解脱。無量無數無辺衆生元各自有一

切煩惱貪嗔惡業。若不断除終不得解脱。至^乃一切迷

人悟得自性始知仏。不見自相不有自智何曾度衆

生。祇為凡夫不見自本心不識仏意執著諸法相不

達無為之理我人不除是名衆生。若離此病実無衆

生得滅度者^上。菩薩本業瓔珞經下^{仏母品}第五云無明

藏与心為一為異。至^乃仏子汝先言無明心一者是事

（卷上乾上 二五丁ウ）

不然。若解与無明諸見一相者応無縛解。凡仏非二。

所以者何。煩惱同一体相故。何以故^①。而共一心生滅

一時不別不異故。仏子若縛解一相者四大可為一。

六味応不異。而大異^②。味異故縛解亦如是。仏子一切

菩薩為凡夫時具足一切結縛而断時麤分先去細

分後除。若一心煩惱一者不応明闇有二。仏子復以

近況遠凡夫善心中尚無不善。何況無相心中而有

無明。仏子而言善惡一心者是汧沙王国中外道安

陀師偈明闇一相善惡一心。仏子我法正義。而可得

言善惡同一行者有縛有解有凡有仏。相続百劫。同

（卷上乾上 二六丁才）

一行者而不得善惡同一心。古仏常說無相智火滅

無明闇。而善惡二別。而言同一果者亦無是処。一切

善受仏果。無明受有為生滅之果。是故善果從善因

（88）（自）①になし

（89）（法）①になし

（90）（汝）①になし

（91）（以）十而①

（92）異+（而）①

生。是故惡果從惡因生。故名善不受生滅之果唯受常仏之果。仏子若凡夫聖人一切善皆名無漏。不受漏果。而言受漏果者仏化衆生行善背惡故緣因而發有漏果報非為無漏。因者無明業受果故。是名三受三苦。苦苦行苦壞苦苦受樂受捨受。二受善緣因果。苦受惡因果。一切皆苦。以無明為本^上。賢愚經第一云當以智慧利劍斷除汝等結使之病^上。凡広勸

(卷上乾上 二六丁ウ)

円密二宗經釈之誠文斷惑滅罪之教誠非一。且秘藏宝鑰云下從人天上至仏果皆是斷惡修善之所感得^上。亦吾祖師上人得円密斷惑之大意而詳勘曰真言天台雖名是頓斷惑証理故猶是漸教也云。若如実所言者不可胎藏金剛經軌之中正釈云。若三妄之迷倒而究竟四曼之内証。亦不可本迹二門經釈之文現判曰斷五住之煩惱而証得二転

(93) (以) ①になし

(94) 慧恵 ①

(95) 誠説 ①

之高果也。問曰粗聞其誠文何如。答曰密教之誠証者如向往往出之也。次至顯宗所談者三惑同斷之所判元品能治之解釈等是其誠証也。學者自知焉。⁹⁶

(卷上乾上 二七丁才)

但至煩惱即菩提生死即涅槃等之文者是則語覺了上之照見未必語凡夫之行事也。夫煩惱之与菩提其体雖無二由因人果上之不同其用大別也。約覺後之照了而見之者其用悉菩提也。約未悟之凡見而言之者其用皆迷法也。譬如牛飲水而出乳汁她服水而吐毒氣也。金剛頂經云我実希有自性清淨以愛染故奉事如來。雖有離染得清淨者能以染故而調伏之^上。註金剛經序云金在中山不知是宝。宝亦不知是山。何以故。為無性故。人則有性取其宝用得遇金師鑿鑿山破取鉉烹鍊遂成精金隨意

(卷上乾上 二七丁ウ)

(96) 焉矣 ①

(97) 註注 ①

使用得免貧苦。四大身中仏性亦爾。身喻世界人我
喻山煩惱喻鉢仏性喻金智慧⁽⁹⁸⁾。喻工匠精進勇猛喻
鑿鑿。身世界中有人我山。人我山中有煩惱鉢。煩惱

鉢中有仏性宝。仏性宝中有智慧工匠。用智慧工匠
鑿破人我山見煩惱鉢。以覺悟火烹鍊⁽⁹⁹⁾見自金剛仏

性了然明淨。是故以金剛為喻因為之名也。空解不
行有名無体。解義修行名体俱備。不修即凡夫修即

同聖者。故名金剛也^上。又云妄念生則暗真智照則⁽¹⁰⁰⁾
明。明即煩惱不生。暗則六塵競起^上。又金剛般若云

若菩薩有我相人相衆生相寿者相即非菩薩^上。同

（卷上乾上 二八丁才）

註云衆生仏性本無有異。緣有四相不入無余涅槃。

有四相即是衆生。無四相即是仏。迷即仏是衆生悟
即衆生是仏。迷人持⁽¹⁰¹⁾有財宝學問族姓輕慢一切人

（98）慧＝恵 ①

（99）鍊＝鉢 ①

（100）則＝即 ①

（101）（即） ①になし

（102）持＝特 ①

名我相。雖行仁義礼智信而意高自負不行普敬。言
我解行仁義礼智信不合敬爾名人相。好事帰己惡
事施於人名衆生相對境取捨分別名寿者相。是謂
凡夫四相。修行人亦有四相。心有能所輕慢衆生名
我相。自持持戒輕破戒者名人相。厭三途苦願生諸
天是衆生相。心愛長年而勤修福業諸執不忘是寿
者相。有四相即是衆生。無四相即是仏也^上。又云即

（卷上乾上 二八丁ウ）

行般若波羅蜜無相無著之行了無我人衆生寿

者四相。無我者無色受想行識也。無人者了四大不
実終帰地水火風也。無衆生者無生滅心也。無寿者

我身本無。寧有寿者。四相既亡即法眼明徹不著有
無。遠離二辺自心如來。自悟自覺永離塵勞妄念自

然得福無辺^上。又金剛經云諸微塵如來說非微塵。

是名微塵。如來說世界非世界。是名世界上⁽¹⁰²⁾。同註云

（103）（也） ①になし

（104）蜜＝密 ①

（105）（無相） ①になし

（106）註＝注 ①

如來說衆生性中妄念如三千大千世界中所有微

塵。一切衆生被妄念微塵起滅不停遮蔽仏性不得

解脫。若能念念真正修般若波羅蜜無著無相之行

(卷上乾上 二九丁才)

了妄念塵勞即清淨法性。妄念既無即非微塵是名

微塵。了真即妄了妄即真真妄俱泯無別有法。故云

是名微塵。性中無塵勞即是仏世界。心中有塵勞即

是衆生世界。了諸妄念空寂故云非世界。証得如來

法身普見塵刹応用無方是名世界上。又云我人頓

尽妄想既除言下成仏上。十住心論第一云知秘号

者猶如麟角迷自心者既似牛毛。是故大慈說此無

量乘令入一切智。若堅論則乘乘差別淺深。横観則

智智平等一味。惡平等者未得為得不同為同。善差

(107) (中) ①になし

(108) 蜜||密 ①

(109) 著十(無) ①

(110) (是名) ①になし

(111) (此) ①になし

(112) 味||味 ①

別者分満不二即離不謬。迷之者以菓天命達之者

(卷乾上 二九丁ウ)

因菓得仙。迷悟在己無執而到。有疾菩薩迷方狂子

不可不慎上。衆文雷同明体用差殊之義。智人思扱

焉智人思扱焉。抑智者大師予挫今問者之邪執。所

謂摩訶止観第二云無行経云貪欲即是道。恚癡亦

如是。如是三法中具一切仏法。若人離貪欲而更求

菩提譬如天与地。貪欲即菩提。浄名云行於非道通

達仏道。一切衆生即菩提相。不可復得。即涅槃相不

可復滅。為増上慢者說離婬怒癡名為解脫。無増上

慢者說婬怒癡性即是解脫。一切塵勞是如來種。山

海色味無二無別。即観諸惡不可思議理也。至問上

(卷上乾上 三〇丁才)

三三昧皆有勸修。此何独無。答六蔽非道即解脫道。

(113) 焉||矣 ①

(114) 焉||矣 ①

(115) 如是||復然 ①

(116) 蔽||蔽 ①

鈍根障重者聞已沈没。若更勸修失旨⁽¹¹⁷⁾逾甚。淮河之北有行大乘空人。無禁投蛇者。今当說之。其先師於善法作觀經久不徹⁽¹¹⁸⁾。放心向惡法作觀獲少定心薄生空解。不識根緣不達仏意純將此法一向教他。教他既久或逢一兩得益者。如虫食木偶得成字便以為証。謂是事实余為妄語。咲持戒修善者謂言非道。純教諸人遍造諸惡。盲無眼者不別是非。神根又鈍煩惱復重。聞其所說順其欲情皆信伏隨從放捨禁戒無非不造罪積山岳。遂令百姓忽之如草。国王大

（卷上乾上 三〇丁ウ）

臣因滅仏法。毒氣深入于今未改。史記云周末有被髮袒身不依礼度者。遂犬戎侵国不絶如緤⁽¹¹⁹⁾。周姬漸尽。又阮籍逸才蓬頭散帶。後公卿子孫皆学之。奴苟

（117）旨＝肯 ①

（118）徹＝微 ①

（119）令＝冷 ①

（120）周末有＝有周末 ①

（121）袒＝祖 ①

（122）緤＝緤 ①

（123）苟＝苟 ①

相辱者方達自然擲節兢持者呼為田舎。是為司馬氏滅相。宇文邕毀廢亦由元嵩魔業。此乃仏法滅之妖怪。亦是時代妖怪。何閑隨自意。何以故。如此愚人心無慧解信其本師。又慕前達決謂是道。又順情為易恣心取樂而不改迷。譬如西施本有心病多喜嘔呻百媚皆轉更益美麗。隣女本醜而学其嘔呻可憎弥劇。貧者遠徙富者杜門穴者深潛飛者高逝⁽¹²⁴⁾。彼

（卷上乾上 三一丁才）

諸人等亦復似是。狂狗逐雷造地獄業。悲哉可傷。既嗜欲樂不能自止。猶如蒼蠅為唾所粘浪行之過。其事略爾。其師過者不達根性不解仏意。仏説貪欲即是道者仏見機宜知一種衆生底下薄福決不能於善中修道。若任其罪流転無已令於貪欲修習止觀。極不得止。故作此説。譬如父母見子得病不宜余藥須黃竜湯鑿齒瀉之服已病愈。仏亦如是説当其機。

（124）（滅）①になし

（125）逝＝遊 ①

快馬見鞭影即致正路。貪欲即是道。仏意如此。若有衆生不宜於惡。修正觀者。仏説諸善名之爲道。仏具二説。汝今云何呵善就惡。若其然者。汝則勝仏。公於

(卷上乾上 三一丁ウ)

仏前灼然違反。復次時節難起。王事所拘不得修善。令於惡中而習止觀。汝今無難無拘。何意純用乳藥毒他慧命。^至乃破壞仏法損失威光。悞累衆生大惡知識。不得仏意其過如是。復次夷嶮兩路皆有能通爲難從嶮。善惡俱通審機入蔽。汝棄善專惡能通達非道何不蹈躡水火穿踰山壁。世間嶮路尚不能通。何況行惡而會正道豈可得乎。^至乃復次檢其惡行事即偏邪。汝謂貪欲即是道陵一切女。而不能噴恚即是

道害一切男。唯愛細滑触是道。畏於打拍苦涉触則無有道。行一不行一。一有道一無道。癡闇如漆。偏行

(卷上乾上 三二丁ウ)

汚損。譬如死屍穢好花園^{云云}。難其偏行如前。或將水火刀杖向之其即默然。或答曰而汝不見我常能入。此乃違心無慙愧語。亦不得六即之意。所以須説此者。上三行法勸策難宜須勸修。隨自意和光入惡。一往則易宜須誠忌。如服大黃湯応備白飯而補止之^已。輔行受之曰。淮河下明師有自行之失。淮河北邪空之人濫稱大乘入惡無觀。故以無禁捉蛇喻之。禁者制也。術法制物故也。貪欲如蛇。觀法如禁。以觀觀欲如捉蛇。不善四句。如無禁。^至乃仏但言欲如火如蛇如毒。^至乃今無觀法。入惡亦爾。言惡不障反爲惡害。

(卷上乾上 三二丁ウ)

- (126) (快) ①になし
(127) 致||到 ①
(128) 此||是 ①
(129) (則) ①になし
(130) 拘|| (牛十句) ①
(131) 拘|| (牛十句) ①
(132) (而) ①になし

- (133) 拍||柏 ①
(134) 花||苑 ①
(135) 之||十 ①

若以妙觀杖入六塵林。遇食欲蛇按四運頭。以觀捉項不令毒害至成身業失於清淨常住法身。彼阿梨者無正觀杖而但說於貪欲不障。義稍欲同。故借喻此^已。往生要集上云。問煩惱菩提若一体者唯応任意起惑業耶。答生如是。解名之為惡取空者。專非

弟子。今反質云。汝若煩惱即菩提。故欣起煩惱惡業亦応生死即涅槃。故欣受生死猛苦。何故於利那苦果猶厭難堪於。永劫苦因者欣自恣作。是故当知煩惱菩提雖是一。時用異故染淨不同。如水与冰。亦如種菓。其体は一隨時用異。由此修道者頭本有仏

（卷上乾上 三三丁才）

性。不修道者終無顯理。如涅槃經三十二云。善男子。若有人問是種子中有果無果耶。応定答言。亦有亦無。何以故。離子之外不能生果。是故名有子。未出芽是故名無。以是義故^⑬。亦有亦無。所以者何。時節有異其体は一。衆生仏性亦復如是。若言衆生中有仏性者。是義不然。何以故。衆生即仏性。仏性即衆生。直以

⑬ 是 此 ①

時異。有淨不淨。善男子。若有問言是子能生果不。是果能生。子不応定答言。亦生不生^上。又同中云今加三通治一能了惑起驚覺其心。呵責煩惱如驅惡賊。防護三業如擎鉢油。如六波羅蜜經云結加趺坐正

（卷上乾上 三三丁ウ）

念觀察以大悲心而為屋宅智慧為鼓以覺悟杖而扣擊之告諸煩惱。汝等当知。諸煩惱賊從妄想生。我法王家有善事起。非汝所為。汝宜速出。若不時出当断汝命。如是告已諸煩惱賊尋自散滅。次於自身善起防護不応放逸。又菩薩処胎經偈云如彼犯罪人擎持滿鉢油若棄油一一滴罪交入大僻^⑭。左右作伎樂懼死不顧視。菩薩修淨觀執意如金剛毀譽及惱乱心意不傾動解空本來淨無彼此中間。二通用四句推求一切煩惱根源。謂此煩惱為由心生為由縁生為共生為離生。若由心生者更不待縁或於龜毛兔

⑭ 責 噴 ①

⑮ 蜜 密 ①

⑯ 僻 壁 ①

⑰ 視 視 ① になし

(卷上乾上 三四丁才)

角底生貪瞋。若由緣生者底不用心。或令眠人生煩惱。若共生者未共各無共時安有。譬如二沙雖合無油。或心境俱合那有不生煩惱時。若離生者既離心離緣。那忽生煩惱。或虛空離二底生煩惱。種種觀察既無実生。無所從來亦無所去。非內非外亦非中間都無処所。皆如幻有。非唯惑心觀心亦爾。如是推求惑心自滅。故心地觀經偈云如是心法本非有凡夫執迷謂非無。若能觀心体性空惑障不生便解脫。又

中論第一偈云諸法不自生亦不從他生不共不無

因是故知無生。底依此偈用多四句。三者底念。今我

(卷上乾上 三四丁ウ)

惑心具足八万四千塵勞門彼弥陀仏具足八万四千波羅蜜門本來空寂一体無礙。貪欲即是道。恚癡

(141) 底 = + (常) ①

(142) 蜜 = 密 ①

亦如是。如水与水性非異処。故經云煩惱菩提体無二。生死涅槃非異処⁽¹⁴³⁾云云。我今未有智火分。故不能解

煩惱水成功德水。願仏哀愍我如其所得法定慧力

莊嚴以此令解脫。如是念已舉声念仏而請救護。如

止觀云如人引重自力不前俛傍救助則蒙輕舉。行

人亦爾。心弱不能排障称名請護惡緣不能壞⁽¹⁴⁴⁾。若

惑覆心不令欲修通別対治須知其意常為心師不

師於心。又云先底發大乘実智知生死由来如大円

(卷上乾上 三五丁才)

覺經偈云一切諸衆生無始幻無明皆從諸如来円

覺心建立当知生死即涅槃煩惱即菩提円融無礙

無二無別而由一念妄心入生死界来無明病所盲

久忘本覺道但諸法從本来常自寂滅相如幻無定

性随心而轉變是故底仏子念三宝翻邪帰正然仏

是医王法是良薬僧瞻病人除無明病開正見眼示

本覺道引接浄土無如仏法僧⁽¹⁴⁵⁾。又妙行心要集上

云煩惱即菩提可有五義一者二名相即謂無煩惱

(143) 氷与水 = 氷与水 ①

名無菩提名一実唯心仮立二名如石女子論黑白也二者転変相即謂迷即煩惱悟即菩提準氷水可

（卷上乾上 三五丁ウ）

知之三者二体相即謂六道煩惱四聖菩提於一心
中体全不二等如一珠中有水火性也四者相資相
即謂煩惱菩提互無妨礙如猪摺金山等也五者仮
実相即謂頼耶藏識染淨和合等如一氷上有寒水
分也五義共詮一心真如耳生死即涅槃亦可如是
上。解釈炳焉莫生致迷矣又煩惱即菩提者大般若
能斷金剛分所說三句法門之意也依夫三句法門
而觀之者応曰煩惱即菩提言煩惱者即非煩惱是
故名煩惱云。守護国界經云有煩惱之縁菩提所謂
絶離著相憍慢也云。又法華云如來如實知見三界

（卷上乾上 三六丁才）

（144）摺＝階②

（145）絶＝絶①

（146）（乃至）①②になし

之相無有生死^{至乃}。不如三界見於三界如斯之事如
來明見無有錯謬云。是亦第三句之意也或又煩惱
即菩提者約性惡以為語全非修惡也云。請問之曰。

三句者金剛般若云。如來說一切法皆是佛法。須菩
提所言一切法者即非一切法。是故名一切法^已。六
祖能大師註之曰。能於諸法心無取捨亦無能所熾
然建立一切法而心常空寂。故知。一切法皆是佛法
恐迷者貪著一切法以為佛法為遣此病故言即非
一切法。心無能所寂而常照定慧齊行体用一致。是
故名一切法^上。又同經云。所言善法者如來說非善

（卷上乾上 三六丁ウ）

法。是名善法^上。同註云。修一切善法希望果報即非

（147）（是）①②になし

（148）（名）①になし

（149）註＝注①

（150）之＋（而）①

（151）定＝文①

（152）註＝注①

（153）註＝注①

善法。六度万行熾然俱作心不望報是名善法^{上巳}。又

同經曰。如來說諸相具足即非具足。是名諸相具足

^{上巳}。同註云。如來者即無相法身是也。非肉眼所見。慧

眼乃能見之。慧眼未明具足生我人等相。以觀三十

二相為如來者。即不名為具足也。慧眼明徹我人等

相不生。正智光明常照。是名諸相具足。三毒未泯。言

見如來真身者。固無此理縱能見者祇是化身。非真

實無相之法身也^{上巳}。夫金剛般若一部始終。皆說如

此三句法門。以遣撥一切衆生之迷執。學者勿致迷

(卷上乾上 三七丁才)

矣。抑仁者正是居第一句之域內。然而又頻旬出第

三句之方外。若夫大妄語与。若又增上慢与。二俱不

足言而已。於怖哉。三逆大授之再來乎。四禪必蕪之

(154) (即) ①になし

(155) 是 ㊦ 乍 ①

(156) (然而又) ①になし

(157) 夫 ㊦ 是 ①

(158) 与 ㊦ 夫 ①

(159) 乎 ㊦ 也 ①

未死乎。其如何。可慎可慎⁽¹⁶⁰⁾。且依応理円成宗。而言之

者。智純觀達煩惱即息是名為寂。煩惱為寂妙智爰

顯言即菩提。全非謂煩惱体即菩提。此義大異性宗

所明惑智一体之義矣。若又依之觀之者。難者所存

弥墮邪見之深坑而已。次言教道云。断証道不斷者。

⁽¹⁶¹⁾凡於断道之次第大分有二。一曰対治断。二曰体達

断⁽¹⁶²⁾。対治断者是偏三行者之所⁽¹⁶³⁾用也。所謂実断破煩

(卷上乾上 三七丁ウ)

悩之迷闇以耀智慧之光用也。体達断者廼円頓行

人之所用也。所謂体達迷悟相即智惑体一。而不失

煩惑之体性焉。然則言円融実教之意是体達断而

非対治断而言教道云断証道不断也。學者莫混淆

矣。問者聞之忽翻邪向正耳。抑若復有人捨乎念仏

而不勤修如貧人忘衣裏之明珠。力士忘額上之宝

(160) 慎 + (矣) ①

(161) 之 + (而) ①

(162) 凡 ㊦ 夫 ①

(163) 断 + (也) ①

(164) 断 + (也) ①

珠乎。若又有人帰乎本願。而持尊号。似窮女得最上之勝金。渴者值清浄之冷水矣。行者自量焉。⁽¹⁶⁵⁾又致聖道修行之人如乘無輶之車而去矣。求浄土往生之彙似乘牢副之輅而往焉。二車運轉之優劣其何如

（卷上乾上 三八丁才）

也。⁽¹⁶⁶⁾問曰縱雖三字無分之衆生。若持六字尊号之妙行必超乎苦海之愛波。速至平樂邦之彼岸。諦聽其義理諦聽其文証矣。於行体者最然也。但若厭欣之用心若起行之意業自匪若夫禹王治洪波之思燕丹得白鷁之志者不得往生者我等庸輩散漫濁乱之異生定絶西方即詣之缺者与。何如。答曰夫持名行者二種之用心縱雖似如君子之交相似而不醇。直求西刹捨余九域独勤称名不涉万行者籠鳥騰空之時拌聖衆来迎之靈粧胞胎逃逝之刻聞簫瑟

- (165) 焉 〓 矣 ①
 (166) 也 〓 矣 ①
 (167) 治 + (乎) ①
 (168) 拌 + (乎) ①
 (169) (靈) ① になし

琴筑之音樂必也矣。仁者不聞乎。彼裴旻逢真虎葉⁽¹⁷⁰⁾

（卷上乾上 三八丁ウ）

公感真竜是其二子便行仮而得真之彙也。若爾者行者等莫泥用心之淺薄而疑順次之往生矣。若有修道之人而欲捨念仏勤余行奚異以金鑠易鑰鑑以錦欄易氈褐哉。智人自可商量焉。噫乎夷齊之大賢也。猶為獄卒之所打矣。孟鳥之風走也。又為阿防之所追焉。夫尊号利劍可截十纏之太索矣。念仏洪波可洗七支之塵垢矣。⁽¹⁷¹⁾南無阿弥陀仏

浄土十勝箋節論卷上

乾上終

（卷上乾上 三九丁才）

- (170) 聞 + (乎) ①
 (171) 逢 + (乎) ①
 (172) 感 + (乎) ①
 (173) 是其 〓 矣 此 ①
 (174) 便 〓 是 ①
 (175) 矣 〓 居 ①
 (176) 箋節 〓 節箋 ①

【書き下し】

又た『宝王論』に云く、^①

『十住婆沙論』并に龍樹菩薩の造『華嚴經』を釈す論の易行品に云く、「菩薩の道に難行の行有り。陸地に舟に乗るが如し。易行の行有り。水路に舟に乗るが如し。阿弥陀仏の本願の力は、若し人、名を聞きて称念すれば、自ら彼の国に帰す。」舟の水を得て又た便風に遇えば、一挙千里するが如し。

亦た易きにあらざるや^上。

大凡^{おおそ}二道の高卑等は、具さに西祖^{馬鳴・龍樹}、東師^{鸞・綽・願・基等の衆賢}等の高判に出づ。文繁きが故に於^こ是に載せず。知ら

んと欲せば^{おもひ}之^を以て看よ。如何が難行なる。非願の故に難行なり。如何が非願なる。自力の故に非願なり。

如何が自力なる。式内の故に自力なり。如何が式内なる。難証の故に式内なり。如何が難証なる。聖道の

故に難証なり。如何が聖道なる。断証なるが故に聖道なり。如何が断証なる。漸成なるが故に断証なり。

如何が漸成なる。頓教に非ざるが故に漸成なり。如何が頓教に非ざる。権教なるが故に頓教に非ざるなり。

如何が権教なる。本懷に非ざるが故に権教なり。権教なるが故に頓教に非ず。頓教に非ざるが故に漸成なり。

漸成なるが故に断証なり。断証の故に聖道なり。聖道の故に難証なり。難証なるが故に式内なり。式

内の故に自力なり。自力の故に非願なり。非願の故に難行なり。

又た如何が易行なる。本願の故に易行なり。如何が本願なる。他力の故に本願なり。如何が他力なる。

格外の故に他力なり。如何が格外なる。易証の故に格外なり。如何が易証なる。往生の故に易証なり。如

何が往生なる。頓撰の故に往生なり。如何が頓撰なる。頓教の故に頓撰なり。如何が頓教なる。実教の故

に頓教なり。如何が実教なる。本懷の故に実教なり。実教の故に頓教なり。頓教の故に頓撰なり。頓撰の

故に往生なり。往生の故に易証なり。易証の故に格外なり。格外の故に他力なり。他力の故に本願なり。本願の故に易行なり。智人商量せよ。智人商量せよ。

夫れ自力難行の修者は覺城に透徹し^{がた}回きこと、譬えば一品を望み及第を経るに^{はなは}大だ遂げ回きが如し。他力易行の持者は淨刹に往詣し易きこと、猶し一官に任じて^②廳官を受くるに尤も得易きに似たり。一切の信男信女等、応に早く難得落第の諸行を抛て、易得受廕の淨土を修すべきのみ。請い問う。曰く、夫れ三学分外の得脱は是れ三部四軸の往生の誠説なり。逆謗犯重の往生は乃ち五部九卷処処の定判なり。学者自ら之れを知れ。抑^{そもそも}当今末法の時に於ては、羊鹿白牛已に斃^{たふ}れて飛輅^{ひろ}独り運び、渾濁造惡の世に於ては二三の法船忽ち沈みて願船特り渡れり。行人豈に之れを欣慶せざるべけんや。有識高智の道人等、^③三学難行の域^{いきん}を出でて、九品易行の妙門に入るべし。

夫れ以れば、瓠^ひを^ひ埒^うり^わり^めを捨つるは、是れ自力泥滯の人、淨教を廢するの謂いか。玄が『莊疏』に云く、「世情に附かざるが故に、大言里耳^{りじ}に合^あわ^わず^⑤」^④。又た曇鸞の『論註』に云く、「非常の言、常人の耳に入らず^⑥」^⑦。樽^{つく}に為る樹^うを^え樹^えるは、乃ち宿善熏芳の^{たぐ}彙^{くわい}いの真宗を執るの謂いか。『經』に云く、

曾て更に世尊を見たてまつるもの、則ち能く此の事を信ず。謙敬して聞きて奉行し、踊躍して大いに歡喜^⑧す^⑨と。

智人商量すべし。余、自力の行者を視聽するに、多く難得難証を憂う。

今教示して曰く、夫れ影を畏れて迹を惡^{にく}む者は、宜しく陰^おに^⑩処^おり、靜に^⑪處^おるべし。行を憂え、難を歎く者は當に聖を捨てて、淨に歸すべし。嗚呼、六賊^⑫知聞して此の法財を失うこと、毒蛇^{どくだ}を愛するよりも過ぎたり。煩惑千間にして無生期し難きこと、碁卵^{かき}を累^{かさ}ねるよりも危うし。行者慎むべし、行者慎むべし。抑^{そもそも}八家大乘^⑬の学者、弘願流行の世に生ずと雖も、弥陀の尊号を唱えずして、我性難頭なりと愁吟する者

は、譬えは薛荔^⑪の達池^⑫に臨みて枯渴を憂うるが如く、又た文武の明玉を見て夜闇を嘆くに似たり。憫^{あわれ}むべし、憫むべし。又た摩尼と明月とは宝珠の高卑、梅檀と沈水とは芬芳^⑬の浅深、式内と格外とは解脱の勝劣、断証と横截とは出離の遅疾、拔苦有道の智人、二道相對して其の殿最^⑭を知るべし。

夫れ以れば三密十乘^⑮の鈍刀は未だ煩惑の縛^{きずな}を斬らず。六字一声の利劍は速やかに業繫^{あだ}の鎌を砕く。誰れの智人か、之れを諍うべけんや。古に云く、医方万品なるは、宜しく対治を選ぶべし。海宝千般なれども、先ず如意を求めよと。若し解脱の捷徑を求むるの人有らば、速やかに三学式内の闡域を出でて、早く六字の格外の妙門に入れ。

夫れ聖道の諸行を修するに、猶おし万仞の船筏を大行の嶮路に盪^おすが如く、淨土の妙業を勤むるに、宛かも一葉の舟舶を巨瀛^{えい}の波瀾に飛ばすに似たり。然るに孰れの彙^ういか是れ昇^{しょう}獲^{かく}なるや。誰れの人か亦た大士なるや。嗚呼、一簣^{いっき}の山を為りて九仞に登らんと欲し、一捻の土を取りて千鈞^{きん}を庄せんと欲す。其れ難からざらんや。慎めや、慎めや。諸方の行者等、甕^{もたい}を抱^{いだ}きて出でて灌ぐこと莫れ。専^{はねつるべ}ら棹^{あやつ}を機^{はな}りて疏^そを潤すべし。

請い問う。密行人の中に適^{たまたま}功能の行者の生死を得脱すること有り。是れ則ち淨刹の往生なるが故に、尤も吾が家の得分なりと謂いつべし。又た設い俱博^⑯等の如きの功能成仏の彙^うい有りと雖も、未だ二失^⑰を遁^{のが}れず。猶お是れ難行自力の道に墮す。何が故に然るや。出獄成仏するは何の言ぞや。蛇覺の妄情を断じて、藤覺の実見を生ずる^⑱。之れを証得菩提と名づくるの故なり。故に去聖遙遠・理深解微の失を招くのみ。

夫れ以れば上悉は是れ難行の摂、中悉は廼^{すなわ}ち易行の益なり。若し爾らば君、真言功能の勝用は淨土真実の巨益を超絶せりと謂うこと莫れ。

亦た円密の宗者、之れを難じて曰く、式内の修行も解脱の正因、格外の称揚も出離の勝業なりと。二道、

緯^{さい}異なり。違諍を致すこと莫れ。戒度の云く、「浄土の法門、大いに常途に異なるなり。但だ願求を作せば、即ち超往^{しやうわう}することを得^え」²⁵と。『文選』に「云く、

陶・匏^{ほう}、品異なれども並びに耳に入るの娛^{たの}しみ為り。黼^ふ・黻^{ふく}、同²⁶じからざれども俱に目を悦^{たの}しむ^{もてあそ}び²⁷為り²⁸上²⁹已³⁰。

又た賁鼓密しくして響を含み、竜笛透いて音を発すといえり。豈に爾らずと云わんや。但だ六大四曼³⁰の

慧灯光り、幽にして二種生死の²⁸大夜未だ曙^{あけ}ず²⁹時³⁰約。止観上乘の智水潤い涸れて、三妄五住³¹の高原、尚お堅し

機約。高識深智の道人等も商量せよ、思扱せよ。

抑^{そも}当^も今末法の時に於て聖道の行果を得んと欲すと雖も、行果得べきこと難し。譬えば木に縁りて魚を求め、山に升りて珠を採るが如く、亦た荷^はを山³²上に樹え、火を井中に畜うに似たり。豈に尅果することを得べけんや。末代惡世の中に於て善く二死の重療^{じゆうさう}を療するは、只だ是れ弥陀尊号の靈藥のみなり。然りと雖も、人、之れを服餌^{ふくじ}せざるが故に多く生死の重病を病めり。古に云く、

病家の廚に嘉饌無きに非ず。乃ち其の人、之れを能く食せざるが故に遂に死す。乱国の官に賢人無きに非ず。乃ち其の君、之れを能く用いざるが故に遂に亡³³ず³⁴と。

唯だ願わくは一切衆生、急に岐路を出でて速かに直道に趣き、持名の大善を行じて九品の淨利に詣ぜよ。『秘藏宝鑰』に云く、

疾に軽重有れば薬に則ち強弱あり。障に厚薄有れば教えに則ち淺深あり。増劫は病輕きをもつて、輪王、人を御し、滅劫は障り厚きをもつて、如来、教えを垂れたまう。五濁惡世、衆生は病重くして三毒鬱として興り、八苦身を迫め福德薄少にして、貪病極めて多し。³⁵乃此の生に惡業を作りて、後に當に三途に墮すべし。三途の苦は劫を経ても免れ難し。如来の慈父、此の極苦を見て其の因果を説きた

まう。惡の因果を説きては其の極苦を抜き、善の因果を示しては其の極果を授く^{上巳}。

之れを以て之れを觀ずれば、根利障輕の彙^いを化するは是れ淺教か。根鈍障重の輩を導くは乃ち深法か。若し爾らば、今此の淨土の一宗は能く五逆八重³⁵の惡輩^すを濟い、三学分外の魯鈍を度す。是れ最大深厚の洪教と謂うべし。

密行の人、難じて曰く、夫れ發心修行・証得菩提の階位を経歷することは是れ偏小權大、漸教の次第なり。發心即到・初心即極の秘奥を開演するは、迺ち円密実大、頓行の妙益なり。『大日經』に云く、「云何が菩提なる。謂く実の如く自心を知るなり³⁶」^{上巳}。『同疏』の第一に云く、「若し実の如く自ら知るは、即ち是れ初發心の時に便ち正覺を成ず。譬えば長者の家の窮子の如く、若し自ら父を識る時に、豈に復た是れ客作の賤人ならんや」³⁷^{上巳}。又た云く、「發意の頃^{あいだ}に於て便ち所詣に至る」³⁸^{上巳}。『秘鍵』に云く、「迷悟、我在れば、則ち發心すれば即ち到る」³⁹^{上巳}と。若し發心の時に於て則ち菩提の果に到らば、豈に遠く修行証果の時を待つべけんや。若し爾らば、聖道難行の過失は唯だ偏小權大の修行のみに在りて全く円密実大の行人には関^{あづか}らざる者をや、何如。

答えて曰く、此の義、太早なり⁴⁰、疎忽なり。夫れ智目行足・到清涼地は是れ四依大聖⁴¹の決判なり。發菩提心・修菩薩行は迺ち円密二教の綱なる者なり。設い円密相応の頓機^た為りと雖も、必ず応に聞信解行証の次第有るべし。譬えば神通の人、空中を飛びて地上を踐まざれども、必ず其の里数を経るが如し。又た彼の在世の得度の人の如きは、皆な聞經の処にして四乗の勝益を得たり。然りと雖も一座聽法の中に於て必ず五位⁴²を経歴せり。何を以て知ることを得とならば、一代諸經の会末を觀ずるに、歡喜奉行の説文有るが故に當機獲益の一段有り。故に如来滅後の行人も亦復た然り。所以に『摩訶止觀』の大意の五略には發大心・修大行・感大果・裂大綱・歸大処と判じ、又た円人の行位を聞信行住・莊嚴建立と定めたり。又た

『摩訶止観』の第五に云く、⁽⁴⁵⁾

復た匠他を闕く。盲跛の師徒、二つ俱に墮落す。瞽瞍の夜遊、甚だ怜愍すべし。応に上の諸人に対し
て此の止観を説くべからず。夫れ止観とは、高尚なる者は高尚なり。卑劣なる者は卑劣なり^上。

『輔行』第五に云く、⁽⁴⁶⁾

盲跛等とは、解無きは盲の如し。行無きは跛の如し。師既に是の若し。弟子知るべし。故に俱に墮落
す。^{至乃}盲跛相い^よ仮りて能く遠至有るが如し。^{至乃}次に瞽瞍とは、目無きを瞽と曰い、足跛を瞍と曰う。

既に盲にして且つ跛えて復た夜遊す。解無く行無くして仏教を失するを無明の夜に遊ぶと曰う。^{至乃}妙
解行高尚なる者は前に信有るが如し^上。

『釈籤』に云く、⁽⁴⁷⁾

今言く、盲にして跛えざるは、行有りて解無きが如し。跛えて盲ならざるは、解有りて行無きが如し。
若し解行具足するは、猶おし二つ全きが如し^上。

『金剛般若』に云く、「善男子善女人、阿耨多羅三藐三菩提心を発して、応に是の如く住し、是の如く其
の心を降伏すべし」⁽⁴⁸⁾。『同註』に云く、⁽⁴⁹⁾

阿の言は無なり。耨多羅の言は上なり。三の言は正なり。藐の言は偏なり。菩提の言は知なり。無と
は諸の垢染無きなり。上とは三界に能く比ぶべき無し。正とは正見なり。偏とは一切智なり。智とは
一切有情に皆な仏性有り、但だ能く修行すれば尽く成仏を得と知るなり。仏とは即ち是れ無上清浄の
般若波羅蜜なり。是れを以て一切の善男子善女人、若し修行せんと欲せば、応に無上菩提の道を知る
べし。応に無上清浄般若波羅蜜多の法を知りて、此れを以て其の心を降伏すべし^上。

又た云く、⁽⁵¹⁾

口に説きて心に行ぜざるは即ち非なり。口に説き心に行ずるは即ち是なり。心に能所有るは即ち非なり。心に能所無きは即ち是なり^上。

又た云く、

無生の理を悟り、希望の心を息め、衆生顛倒の知見を遠離すれば、即ち波羅蜜彼岸に到る。永く三塗を出でて無余涅槃を証すればなり^上。

又た云く、「深く無相の理を解するが故に、善く仏意に契^{かな}うが故に、仏如是と言う。如是の言は是れ印可⁵⁴の辞なり^上」。又た『註金剛經』に云く、

学人、如来の深意を解せずして、但だ如来所説の教法のみを誦して本心を了^{さと}らず。本心を了らざれば終に成仏せず。故に不可説と言う。口に誦して心に行ぜざるは即ち非法なり。口に誦し心に行じて無所得を了らば即ち非非法なり^上。

牟^{ぼうし}子に曰く、

如^もし其れ言無くんば、五千何ぞ述べんや。若し知りて言わざるは可なり。既に知ること能わず。又た言うこと能わざるは愚人なり。故に能く言いて行うこと能わざるは国の師なり。能く行いて言うこと能わざるは国の用なり。能く行い能く言うは国の宝なり。三品^{おのおの}各施す所有り。何ぞ徳の賤^{いや}しきことあらんや。唯だ言うこと能わず、又た行うこと能わざるは是れを賤と謂^いう^上。

凡そ六⁵⁹即七⁶⁰位の階級は、専ら是れ聞信解行証の次第なる者をや。又た『菩提心論』に云く、

人の名官を貪ずる者は、名官を求むる心を発して、名官を理^{おさ}むる行いを修し、若し財宝を貪ずる者は、財宝を求むる心を発して、財物を経営する行いを作すが如し。凡そ人の善と惡とを為さんと欲するに、皆な先ず其の心を標^{しる}して、而して後に其の志を成ず。所以に菩提を求むる者は、菩提心を発して菩提

の行を修すべし^{至乃}。凡そ瑜伽の觀行を修習する人は、當に須く具さに三密の行を修して、五相成身の義を証悟すべし^{上巳}。

夫れ本論一部の始末を案ずるに、上に勝義・行願・三摩地⁶³の三種の菩提心を勧め、下に三密・瑜伽・五相成身の行証を教えたり。正しく是れ真言行者の因根究竟の次第なるのみ。但だし出だし難する所の衆文に至りては、或いは是れ不起于座三摩地現前の頓機有りて、発心已後、即ち一念一座の中に於て、頓に聞信解行証の五位を具足するに約して、以て語^いうことを為す。三祇⁶⁴を一念に超え、万行を一善に摂する等是れなり。

或いは又た只だ菩提心の靈徳を歎ず。所謂る一足衢^{ちまた}に迷えば行千里を失い、安心僻越^{へきえつ}すれば万行徒^{いふ}に設^{もう}く。然るに今、生生にも逢い難き三密の外教に値い、世世にも発し難き無上の道心を発して、妙に六大四曼の体相を了知し信解せり。此の上に毘盧の大行を勤修して、遮那の境智を究竟せん⁶⁷ことの遅速に於ては、宜しく行者の進退に在るべし。故に初発の功力を歎じて、以て「発心則到」等と云うなり。全く修行証果の次第有るを遮せざるのみ。或いは是れ因中説果の意なるべし。所謂る『涅槃經』二十七に云く、

善男子、譬えば人有り、悪心をもて母を害す。害し已りて悔を生ず。三業善なりと雖も是の人^{こゝろ}故に地獄人と名づくるが如し。何を以ての故に。是の人定んで當に地獄に墮すべきが故に。是の人地獄の陰界諸入⁷⁰無しと雖も、猶お故に名づけて地獄人と為ることを得。善男子、是の故に我れ諸經の中に於て説く。若し人有り、善を修行する者を見れば天人を見ると名づけ、惡を修行する者をば地獄を見ると名づく。何を以ての故に。定んで報を受くべきが故に。善男子、一切衆生は定んで阿耨多羅三藐三菩提を得べきが故に。是の故に我れ、一切衆生に悉く仏性有りと説く。一切衆生眞實に未だ三十二相八十種好有らず^{上巳}。

凡そ道理成仏の法は、必ず聞信解行証の五位を経るなり。智人思忖せよ。抑そもまた『秘鍵』の「発心即到」の文を引きて、修行を待たずして唯だ発心の功用のみに由りて、直ちに覺王城に到るといふの誠証に備うることに、大いに解釈の大猷だいこうに迷いて、以て一句の文言を執するのみ。今具さに文の前後を勘出して、以て贗徒の執弊を撥却はたきせん。『秘鍵』に云く、

夫れ仏法遙かなるに非ず。心中にして即ち近し。真如外に非ず。身を棄てて何れにか求めん。迷悟、我れに在れば、則ち発心すれば即ち到る。明暗他に非ず。則ち信修すれば忽ちに証す已上。

夫れ上に「発心即到」と云い、下に「信修忽証」と云う。是れ豈に発心修行、証大菩提の次第を示すに非ずや。学者、眼を著けて文意を看取せよ。凡そ此の文に於ては、全く問者の援拠に非ず。正しくはれ小子が誠証なるのみ。抑そも今小子、君に問わん。君、已に云何が菩提心・如実知自心・知一切法皆是仏法等の円密の大菩提心を発得して、故に頻りに匄ねがつて「発心即到」と曰うか。將た又た自らは未いまだなれども、只だ其の教理を立つるのみか。若し未にして之れを言わば「日夜他の宝を数えて自ら半銭の分無し」の嚴誠、奚ぞ通のがることを得んや。若し未だ円密の大心を発得せずば、速やかに他力の要行を勤めよ。時に密行の人、服膺ふくようして恥慙す。

又た或る円密の行者難じて曰く、夫れ円密両宗の行相を案ずるに、或いは「無明塵勞即是菩提」と云い、或いは「貪欲即是道患癡亦復然」と言えり。若し之れに依りて之れを觀ぜれば、凡位を動ぜずして当処即ち果仏なり。断証を仮らずして直爾ただちに是れ覺体なり。又た「教道云断証道不断」と判ずる者をや。若し爾らば、奚ぞ難行難証の憂い有らんや。

答えて曰く、五悔ごげ修行の明文有り、召罪摧罪の印明有り。豈に是れ止惡修善滅惑証理の義相に非ず。『金剛頂經』に云く、

好色相を見ざる者は即ち是れ罪障なり。応に釣罪障の契を以て彼の諸罪を釣り、復た摧破諸罪の契を以て之れを摧破すべしと。

又た『金剛頂經』に云く、⁽⁸⁰⁾

或いは衆生有りて、深く邪見に入りて正法を樂わず、世間の資財飲食に耽著して外道天神を信じて顛倒に住せん者、亦た応に勸進して此の金剛界の壇場に入らしむべし。彼の邪見の衆生を抜きて、惡趣を離れしめんと欲するが為の故なり已上。

又た『撰真實經』に云く、⁽⁸¹⁾

若し凡夫の人、此の觀門を修せば、五逆一闡提等の惡業を造ると雖も、悉く皆な消滅して時に応じて便ち五種三昧を獲⁽⁸²⁾已^上。

大底登壇灌頂の儀則、阿遮多擊の脫喝⁽⁸³⁾、皆な是れ禁惡防非の幟幟、斷惑証理の相貌なるのみ。高識の密人、^{おのおのね}應に知るべし。又た『法華』第一に云く、⁽⁸⁴⁾

若し人信じて仏に歸するに如來は欺誑ならず。亦た貪嫉の意無し。諸の法中の惡を斷じたまえり。故に仏、十方に於て而も独り畏るる所無し^上已。

同第五に云く、⁽⁸⁵⁾

如來亦復た是の如し。三界の中に於て大法王と為りて、法を以て一切衆生を教化したまう。賢聖の軍の五陰魔・煩惱魔・死魔と共に戦いて大なる功勳有りて、三毒を滅し三界を出でて、魔網を破るを見たまいて、爾の時如來、亦た大いに歡喜したまう。此の法華經は能く衆生をして一切智に至らしむ^上已。

『註金剛經』に云く、⁽⁸⁶⁾

滅度とは大解脫なり。大解脫とは煩惱及び習氣の一切の諸の業障滅尽して、更に余り有ること無き、

是れを大解脱と名づく。無量無數無辺の衆生に元より各自に一切の煩惱貪嗔惡業有り。若し断除せずんば終に解脱を得ず。^{至乃}一切の迷人は、自性を悟り得て始めて仏を知る。自相を見ず、自の智有らざれば何ぞ曾て衆生を度せん。祇^た凡夫は自の本心を見ざるが為に仏意を識らず、諸の法相に執著して無為の理に達せず、我人を除かず、是れを衆生と名づく。若し此の病を離れぬれば、実に衆生の滅度を得る者無からん^{上巳}。

『菩薩本業瓔珞經』の下に^{第五品}云く、⁽⁸⁷⁾

無明藏⁽⁸⁸⁾と心と一と為んや、異と為んや。^{至乃}仏子、汝先に無明と心と一なりと言うは、是の事然らず。若し解と無明諸見と一相ならば、応に縛解無かるべし。凡と仏と二に非ず。所以は何ん。煩惱同一体相なるが故に。何を以ての故に。而も共に一心の生滅一時にして別ならず、異ならざるが故に。仏子、若し縛解一相ならば、四大一と為すべし。六味⁽⁸⁹⁾応に異ならざるべし。而るに大いに異なり。味異なるが故に、縛解も亦た是の如し。仏子、一切の菩薩凡夫^た為りし時、一切の結縛を具足し、断ずる時は麤分先ず去りて、細分後に除く。若し一心と煩惱と一ならば、応に明闇二有るべからず。仏子、復た近を以て遠を況するに、凡夫の善心の中に尚お不善無し。何に況んや、無相の心中に而も無明有らんや。仏子、而も善惡一心と言う者は、是れ⁹¹泐沙王国中の外道安陀師が偈に「明闇一相、善惡一心」といやり。仏子、我が法正義なり。而も善惡同一行と言うことを得べくんば、縛有り、解有り、凡有り、仏有り。相續すること百劫なり。同一行ならば而も善惡同一心なることを得ず。古仏常に無相の智火は無明の闇を滅すと説く。善惡の二つ別なり。而も同一果と言うは亦た是の^{ことわり}処無し。一切の善は仏果を受く。無明は有為生滅の果を受く。是の故に善果は善因従り生ず。是の故に惡果は惡因従り生ず。故に善は生滅の果を受けず、唯だ常仏の果を受くと名づく。仏子、若し凡夫聖人は一切の善を皆な無

漏と名づく。漏果を受けず。而るに漏果を受くと言うは、仏衆生を化するに善を行じ、惡に背くが故に因に縁りて、有漏果報を發して無漏と爲るに非ず。因は無明業、果を受くるが故に。是れを三受⁹³三苦と名づく。苦苦・行苦・壊苦、苦受・樂受・捨受なり。二受は善縁の因果なり。苦受は惡の因果なり。一切皆な苦なり。無明を以て本と爲す^上。

『賢愚經』第一に云く、「當に智慧の利劍を以て汝等が結使の病を斷除すべし⁹⁵」^上。凡そ広く円密二宗經釈の誠文を勘うるに、斷惑滅罪の教誡一に非ず。且く『秘藏宝鑰』に云く、「下人天從り、上仏果に至るまで、皆な是れ斷惡修善の感得する所なり」^上。亦た吾が祖師上人大いに円密斷惑の大意を得て、詳勘して曰く、「真言天台是れ頓と名づくとも雖も、斷惑証理するが故に猶お是れ漸教なり」⁹⁷云。若し實に言う所の如くならば、胎藏金剛經軌の中に正しく釈して、三妄の迷倒を尽くして四曼の内証を究竟すと云うべからず。亦た本迹二門經釈の文に現に判じて、五住の煩惱を斷じて二転の高果を証得すとも曰うべからざるなり。問て曰く、粗ぼ其の誠文を聞かん、何如。答えて曰く、密教の誠証は、向き^さに往往之れを出すが如し。次に顯宗の所談に至りては、三惑同斷⁹⁸の所判、元品能治⁹⁹の解釈等は是れ其の誠証なり。學者自ら知れ。但し煩惱即菩提、生死即涅槃等の文に至りては、是れ則ち覺了の上の照見を語して、未だ必ずしも凡夫の行事を語わず。夫れ煩惱と菩提と、其の体無二と雖も、因人・果上¹⁰⁰の不同に由りて、其の用、大いに別なり。覺後の照了に約して之れを見れば、其の用悉く菩提なり。未悟の凡見に約して之れを言え、其の用、皆な迷法なり。譬えば牛は水を飲みて乳汁を出だし、蛇は水を服して毒氣を吐くが如し。『金剛頂經』に云く、

我、実に希有にして自性清淨なれども、愛染を以ての故に如来に奉事したてまつる。染を離れて清淨を得る者有りと雖も、能く染を以ての故に之れを調伏す^上。

『註金剛經』の序に云く、

金は山中に在れども、山、是れ宝なることを知らず。宝も亦た是れ山なることを知らず。何を以ての故に。性無きが為の故に。人は則ち性有りて其の宝を取りて用いて、金師に遇うことを得て、山を鑿さんさく鑿し、破して鉉せんを取りて烹鍊ほうれんして遂に精金と成じ、意に随いて使用して貧苦を免るることを得。四大身中の仏性も亦た爾なり。身を世界に喩え、人我を山に喩え、煩惱を鉉に喩え、仏性を金に喩え、智慧を工匠に喩え、精進勇猛を鑿鑿に喩う。身世界の中に人我の山有り。人我の山中に煩惱の鉉有り。煩惱の鉉中に仏性の宝有り。仏性の宝中に智慧の工匠有り。智慧の工匠を用いて人我の山を鑿さり破りて煩惱の鉉を見る。覚悟の火を以て、烹鍊するときは、自らの金剛の仏性を見ることが了然として明淨なり。是の故に金剛を以て喩えと為して因りて之れが名と為す。空を解して行ぜざれば、名のみ有りて体無し。義を解して修行すれば、名体俱に備わる。修せざれば即ち凡夫、修すれば即ち聖者に同じ。故に金剛と名づく上巳。

又た云く、

妄念生ずるときは則ち暗く、真智照らすときは則ち明なり。明なれば即ち煩惱生ぜず。暗ければ則ち六塵競いい起こる上巳。

又た『金剛般若』に云く、（四）「若し菩薩に我相・人相・衆生相・寿者相有るは、即ち菩薩に非ず」上巳。
『同註』に云く、

衆生と仏性と、本異なり有ること無し。四相有るに縁りて無余涅槃に入らず。四相有れば、即ち是れ衆生なり。四相無きは即ち是れ仏なり。迷うときは即ち仏も是れ衆生、悟るときは即ち衆生も是れ仏なり。迷人は財宝有るを恃んで族姓しやくせいを學問し、一切の人を輕慢するを我相と名づく。仁義礼智信を行

うと雖も、而も意高ぶり、自負して普敬を行わず。我れ仁義礼智信を行うことを解せり、爾れを敬す合ずべからと言うを人相と名づく。好事は己に帰し、悪事は人に施すを衆生相と名づけ、境に対して取捨分別するを寿者相と名づく。是れを凡夫の四相と謂う。修行人も亦た四相有り。心に能所有りて、衆生を輕慢するを我相と名づく。自ら持戒を恃んで、破戒の者を輕んずるを人相と名づく。三途の苦を厭い、諸天に生ぜんと願うは是れ衆生相なり。心に長年を愛このんで、福業を勤修し諸執を忘せざるは、是れ寿者相なり。四相有るは即ち是れ衆生なり。四相無きは即ち是れ仏なり上已。

又た云く、

即ち能く般若波羅蜜無相無著の行を行じて、我・人・衆生・寿者の四相無きことを了す。無我とは色受想行識無きなり。無人とは四大は不実にして終に地水火風に歸することを了するなり。無衆生とは生滅の心無きなり。無寿とは我が身、本無なり。寧ろ寿者有らんや。四相既に亡すれば即ち法眼明徹にして有無に著せず。二辺を遠離するは自心の如来なり。自悟自覺して永く塵勞妄念を離すれば、自然に福を得ること無辺なり上已。

又た『金剛經』に云く、

諸の微塵は如来、微塵に非ずと説きたまう。是れを微塵と名づく。如来、世界と説きたまうは世界に非ず。是れを世界と名づく上已。

『同註』に云く、

如来説きたまうところは、衆生の性中の妄念は三千大千世界の中の所有の微塵の如し。一切衆生は妄念の微塵の起滅、停とどまらざるを被りて、仏性を遮蔽して解脱を得ず。若し能く念念真正にして般若波羅蜜無著無相の行を修すれば、妄念塵勞即ち清淨の法性なることを了す。妄念既に無し、即ち微塵に

非ず、是れを微塵と名づく。真即ち妄なることを了し、妄即ち真なることを了すれば、真妄俱に泯しほろぼて別に法有ること無し。故に是れを微塵と名づくと言いたまう。性中に塵勞無きは即ち是れ仏世界なり。心中に塵勞有るは即ち是れ衆生世界なり。諸の妄念空寂なることを了するが故に、非世界と云う。如來の法身を証得して普く塵刹を見て応用無方なる、是れを世界と名づく上。

又た云く、「我人頓に尽き、妄想既に除きて言下に成仏す」上。『十住心論』第一に云く、

秘号を知る者は猶し鱗角うろこの如く、自心に迷える者は既に牛毛うしけに似たり。是の故に大慈、此の無量乗を説きて一切智に入れしめたまう。若し堅に論ずれば則ち乘差別にして淺深あり。横に觀ずれば則ち智智平等にして一味なり。惡平等の者は未得を得と爲し、不同を同と爲す。善差別の者は分滿不二にして即離謬みだらず。之れに迷える者は藥を以て命いのちを夭はらし、之れに達する者は藥に因りて仙を得。迷悟己れに在りて無執にして而も到る。有疾の菩薩、迷方の狂子、慎まざればあるべからず上。

衆文、雷同どうどうして体用差殊の義を明かす。智人思忖せよ、智人思忖せよ。

抑おさへ智者大師、予め今の問者の邪執を挫きたまえり。所謂る『摩訶止觀』第二に云く、

『無行經』に云く、「貪欲は即ち是れ道なり。恚癡も亦た是の如し。是の如きの三法の中に一切の佛法を具せり。若し人、貪欲を離して更に菩提を求むるは、譬えば天と地との如し。貪欲即菩提なり。『淨名』に云く、「非道を行じて仏道を通達す。一切衆生即菩提の相なり。復た得べからず。即ち涅槃の相、復た滅すべからず。増上慢の者の爲に恚怒癡を離るるを名づけて解脱なりと爲すと説く。増上慢無き者には恚怒癡の性は即ち是れ解脱なりと説く。一切の塵勞は是れ如來の種なり」。山海色味、二無く別無し。即ち諸惡の不可思議の理を觀ず。至乃問う、上の三の三昧に皆な勸修有り。此れ何ぞ独り無き。答う、六蔽ろくがいの非道は即ち解脱の道なり。鈍根障重の者、聞き已りて沈没す。若し更に勸修せ

ば、旨を失すること逾いよいよ甚しからん。淮河の北に大乘の空を行ずる人有り。禁無くして蛇を投なる者なり。今当に之れを説かん。其の先師、善法に於て觀を作るに経ること久しくして徹せず。心を放はないまにして惡法に向かいて觀を作るに少しの定心を獲て薄すくし空解を生ぜり。根縁を識らず、仏意に達せずして純もつら此の法を將もつて一向に他を教う。他を教うることに既に久しくして、或いは一兩、益を得る者に逢いぬ。虫の木を食はんで偶たま字を成すことを得るが如きを使もちち以て証と為す。是の事、実なりと謂うを余は妄語と為す。持戒修善の者を咲わらいて謂いて非道と言う。純ら諸人を教えて遍く諸惡を造らしむ。盲の眼無き者、是非を別たず。神根又た鈍く、煩惱復た重し。其の所説を聞くに、其の欲情に順ずれば皆な信伏随從して禁戒を放捨し、非として造らざること無く、罪、山岳と積む。遂に百姓をして之れを忽ゆるせにすること草の如くならしむ。国王・大臣、因りて佛法を滅す。毒氣深く入りて今に于て未だ改まらず。『史記』に云く、「周の末に被おほ髮・祖身はだかみ、礼度に依らざる者有り。遂に犬戎けんじゆう、国を侵し絶えざること縦いとすしの如し。周姫漸く尽きぬ」。又た「阮籍げんせき、逸才にして蓬頭散帶そうとうさんたい。後に公卿の子孫、皆な之れを学ならえり。奴に苟かりそめにして相い辱しむる者は方に自然に達せりといひ、擲そんせつ節きやうじ兢きやう持ぢする者は呼びて田舎と為す。是れを司馬氏の滅する相と為す」。宇文邕うぶんおが毀廢せるも亦た元嵩げんそうが魔業に由るの故に。此の如きの愚人は心に慧解無くして、其の本師を信ず。又た前達を慕うて決して是れ道なりと謂おもえり。又た情に順ずること易しと為して心を恣ほしいままにし、樂を取りて迷いを改めず。譬えば、西施し、本心むねの病有りて多く嘔ひんしん呻しんを喜よろこむに、百の媚もび皆な転じて更に美麗を益ませり。隣女本より醜みにくにして其の嘔呻を学まなぶに憎にくむべきこと弥いよいよ劇げつし。貧しき者は遠く徙うつり、富める者は門を杜とし、穴にすむ者は深く潜じ、飛ぶ者は高く逝くが如し。彼の諸人等も亦復た是れに似たり。狂狗、雷を逐おうて地獄の業

を造る。悲しいかな傷むべし。既に欲樂を嗜んで自ら止むこと能わず。猶し蒼蠅の唾の為に粘ねばされて浪行の過ぐるが如し。其の事、略して爾なり。其の師の過をいわば根性に達せず、仏意を解せざるなり。仏の貪欲即是道と説きたまうことは、仏は機宜を見て、一種の衆生、底下薄福にして決して善の中に於て道を修すること能わず。若し其の罪に任せば流転已むこと無けんと知らしめして、貪欲に於て止觀を修習せしむ。極めて止むことを得ず。故に此の説を作る。譬えば、父母の子の病を得るを見るに、余の藥に宜しからざれば、黃童湯(註)に須いて齒を鑿うがちて之れを瀉そそぐに、服し已りて病愈えたるが如し。仏も亦た是の如く、説、其の機に当たれり。快馬は鞭影を見て即ち正路に致る。貪欲即是道という仏意、此の如し。若し衆生有りて惡に於て止觀を修するに宜しからざれば、仏、諸善を説きて之れを名づけて道と爲したまう。仏は二説を具したまえり。汝、今云何ぞ善を呵して惡に就く。若し其れ然らば汝は則ち仏に勝れり。公あらわとして仏前に於て灼然として違反す。復た次に時節に難起こり、王事に拘られて善を修することを得ざれば、惡の中に於て止觀を習わしむ。汝、今難も無く拘も無し。何意ぞ純ら乳藥を用いて他の慧命を毒やぶる。至乃乃仏法を破壊し、威光を損失し、悞あやまりて衆生を累わづらわす、大惡知識なり。仏意を得ざる其の過、是の如し。復た次に夷嶮の兩路(註)、皆な能く通ずること有れども、難の為に嶮に従う。善惡俱に通ずれども機を審かにして蔽に入るべし。汝、善を棄てて惡を専らにして能く非道に通達せば、何ぞ水火を蹈躡とうしよし山壁を穿踰(註)せざる。世間の嶮路すら尚お通ずること能わず。何に況んや惡を行じて而も正道に会すること、豈に得べけんや。至乃復た次に其の惡行の事を撿ずるに即ち偏邪なり。汝、貪欲即是道なりと謂いて一切の女を陵ず。而れども嗔恚即是道なりと謂いて、一切の男を害すること能わず。唯だ細滑の触を愛して是れ道なりと謂いて打拍苦渋の触を畏れて、則ち道有ること無しという。一を行じ、一を行ぜず。一は道有り、一は道無し。癡闇なること漆の如し。

偏に汚損を行ず。譬えば、死屍の好花園を穢すが如し云。其の偏行を難ずること前の如し。或いは水火刀杖を將いて之れに向かえば、其れ即ち默然たり。或いは答えて曰く、而も汝、我れ常に能く入ると見ずや。此れ乃ち心に違える無慙愧の語なり。亦た六即の意を得ず。所以に此れを説くことを須ゆる者は、上の三行法は勸策難ければ、宜しく勸修すべし。随自意は光を和して惡に入る。一往則ち易ければ宜しく誠忌すべし。大黃湯を服するが如く、応に白飯を備えて之れを補止すべし上。

『輔行』に之れを受けて曰く、

淮河わいがより下るは師に自行の失有ることを明かす。淮北河北の邪空の人、濫みだりに大乘と称して惡に入りて觀無し。故に禁無くして蛇を捉うるを以て之れに喩う。禁とは制なり。術法、物を制する故なり。貪欲は蛇の如く、觀法は禁の如し。觀を以て欲を觀れば蛇を捉うるが如し。不善の四句、禁無きが如し。至乃仏は、但だ欲は火の如く、蛇の如く、毒の如しと言いたまえり。至乃今觀法無くして惡に入るも亦た爾なり。惡障えずと言いて、反かえりて惡の為に害せらる。若し妙觀の杖を以て六塵の林に入りて、貪欲の蛇に遇いて四運しゆんの頭を按おし、觀を以て項うなじを捉うるに、毒害至りて身業を成ずるに、清淨常住の法身を失わしめず。彼の『阿梨』あにとは、正觀の杖無くして但だ貪欲障えずと説けり。義、稍やや同じからんと欲す。故に借りて此れに喩う上。

『往生要集』上に云く、

問う、煩惱菩提、若し一体ならば、唯だ応に意に任せて惑業を起すべしや。答う、是の如き解を生ずるを、之れを名づけて惡取空あくしゆくうの者と為す。専ら仏弟子に非ず。今反質はんせつして云く、汝、若し煩惱即菩提なるが故に欣いて煩惱惡業を起さば、亦た応に生死即涅槃なるが故に欣いて生死の猛苦を受くべし。何が故ぞ、刹那の苦果に於ては猶お堪え難きを厭い、永劫の苦因に於ては自ら恣ほしいままに作らんと

を欣わん。是の故に当に知るべし。煩惱と菩提とは体是れ一なりと雖も、時^じ用^{よう}異なるが故に染淨不同なり。水と氷との如く、亦た種と菓との如く、其の体是れ一なれども時に随いて用異なり。此れに由りて道を修する者は本有仏性を顕わし、道を修せざる者は終に理を顕わすこと無し。『涅槃經』の三十二に云うが如し。「善男子、若し人有りて是の種子の中に果有りや、果無しやと問わば、応に定んで答えて言うべし。亦たは有り、亦たは無しと。何を以ての故に。子^{たね}を離れて之の外に果を生ずること能わず。是の故に子有りと名づく。未だ芽を出さず。是の故に無しと名づく。是の義を以ての故に、亦たは有り、亦たは無し。所以は何ん。時節異有れども、其の体是れ一なり。衆生の仏性も亦復た是の如し。若し衆生の中に仏性有りと言わば、是の義然らず。何を以ての故に。衆生は即ち仏性、仏性は即ち衆生なり。直だ時の異を以て、淨と不淨と有るなり。善男子、若し問うて是の子は能く果を生ずるや不や。是の果は能く子^みを生ずるや不やと言ふこと有らば、応に定んで答えて言うべし。亦たは生じ、生ぜずと」上^上。

又た同中に云く、

今三の通の治を加え、一には能く惑の起るを了して、其の心を驚覺す。煩惱を呵責すること惡賊を驅^かるが如くすべし。三業を防護すること油鉢^{くわく}を擎^さぐるが如くせよ。『六波羅蜜經』に云うが如く、結加趺坐して正念に觀察して、大悲心を以て而も屋宅と爲し、智慧を鼓と爲し、覺悟の杖を以て而して之れを扣き撃ち、諸の煩惱に告げよ。「汝等、當に知るべし。諸の煩惱の賊は妄想より生ず。我が法王の家に善事起ること有り。汝が所爲にあらず。汝、宜しく速かに出づべし。若し時に出でずんば、當に汝が命を斷つべし」。是の如く告げ已るに、諸の煩惱の賊^{すなわ}尋^{すなわ}ち自ら散滅せん。次に自身に於て、善く防護を起して、放逸すべからずと。又た『菩薩處胎經』の偈に云く、「彼の犯罪の人の、鉢に満

てる油を撃げ持ちて、若し油を棄つること一滴もすれば、罪大僻⁽¹⁰⁾に交り入らん。左右に伎楽を作すとも、死を懼れて顧視⁽¹¹⁾せざるが如し。菩薩の淨觀を修するに、執意金剛の如くし、毀誉及び悩乱するに、心意傾動せず、空にして本より來た淨⁽¹²⁾にして、彼此の中間も無しと解⁽¹³⁾る」と。二には、通じて四句を用いて、一切の煩惱の根源を推求せよ。謂く、此の煩惱は心に由りて生ずとや為ん、縁に由りて生ずとや為ん、共に生ずとや為ん、離して生ずとや為ん。若し心に由りて生ずといわば、更に縁を待たずして、或いは龜毛・兔角⁽¹⁴⁾に於て、貪瞋を生ずべし。若し縁に由りて生ずといわば、心を用いざるべし。或いは眠人をして煩惱を生ぜしむべし。若し共に生ずといわば、未だ共せざる時各々無く、共せる時に安ん⁽¹⁵⁾ぞ有らん。譬えば二の沙合すと雖も、油無きが如し。或いは心境俱に合するに、那⁽¹⁶⁾んぞ煩惱を生ぜざる時有らん。若し離して生ずといわば、既に心を離れ縁を離る。那⁽¹⁶⁾んぞ忽ち煩惱を生ぜん。或いは虚空の二を離れたる、応に煩惱を生ずべし。種種觀察するに、既に実の生無し。従りて来る所無く、亦た去る所無し。内に非ず、外に非ず、亦た中間に非ず、都て処所無し。皆幻の如くして有なり。唯だ惑心のみに非ず、觀心も亦た爾なり。是の如く惑心を推求するに自ら滅す。故に『心地觀經』の偈に云く、「是の如きの心法は本より有に非ざれども、凡夫執迷して無に非ずと謂⁽¹⁷⁾えり。若し能く心の体性⁽¹⁸⁾の空なるを觀すれば、惑障生ぜずして便ち解脱す」と。又た『中論』第一の偈に云く、「諸法は自よりも生ぜず、亦た他従りも生ぜず、共ならず、無因にあらず、是の故に知んぬ、無生なりということ」。応に此の偈に依りて、多の四句を用ゆべし。三には念ずべし。「今、我が惑心に具足せる八万四千の塵勞門と、彼の弥陀仏の具足したまえる八万四千の波羅蜜門と、本来空寂にして、一体無礙なり。貪欲即ち是れ道なり。患癡も亦た是の如し。氷と水との性の異処に非ざるが如し。故に經に云く、「煩惱と菩提と体無二なり。生死と涅槃と異処に非ず」云云。我れ今、未だ智火の分有ら

ず。故に煩惱の水を解いて、功德の水と成すこと能わず。願わくは仏、我を哀愍して、其の所得の法の如くし、定慧の力莊嚴せる、此れを以て解脱せしめたまえ」と。是の如く念じ已りて、声を挙げて念仏して而して救護を請え。『止観』に云うが如く、「人の重きを引くに、自力にて前すまずんば、傍の救助を仮りて、則ち軽く挙ぐることを蒙るが如し。行人も亦た爾なり。心弱くして障りを排うこと能わずんば、名を称して護を請うに、惡縁壞すること能わず」^上。若し惑、心を覆うて、通別の対治を修することを欲せしめずんば、須く其の意を知りて、常に心の師と為りて、心を師とせざるべし。然るに今、弥陀覺王は瓦礫變金の宏誓を立てたまう。我等庸輩^⑩、厭惡塵埃の懇情を發す。故に千即到千化、万即万變の勝利有る者なり。豈に夫の非情變化の事に同じからんや。智人自量せよ。夫れ戒定慧の三字は即ち行者三業の修行なり。謂く持戒は身口の勤め、定慧は意業の行なり。

然るに本願の文を見るに「至心信樂欲生我國」とは、是れ意識の所作なりと雖も、只だ是れ厭欣安心にして全く定慧に非ず。「乃至十念」とは、身口の行業なりと雖も、亦た即ち語業称名にして更に戒行にあらず。卓拔高識の学者、自ら思忖すべし。又た黒谷尊師云く^⑪

若し智慧高才を以て本願と為したまわば、愚鈍下智の者は定んで往生の望を絶たん。然るに智慧の者は少く愚癡の者は甚だ多し。若し多聞多見を以て本願と為したまわば少聞少見の輩は定んで往生の望を絶ん。然るに多聞の者は少く、少聞の者は甚だ多し。若し持戒持律を以て本願と為したまわば、破戒無戒の人は定んで往生の望を絶たん。然るに持戒の者は少く、破戒の者は甚だ多し。自余の諸行も之れに準じて応に知るべし。当に知るべし、上の諸行等を以て本願と為したまわば、則ち往生を得る者は少く往生せざる者は甚だ多からん。然れば則ち弥陀如来法藏比丘の昔、平等の慈悲に催されて普く一切を摂せんが為に、造像起塔等の諸行を以て往生の本願と為したまわず、唯だ称名念仏の一行を

以て其の本願と為したえるなり、云々。

夫れ行者等、設い縁事縁理の誓心無しと雖も、唯だ本願仰頼の信を以て、以て其の要心と為し、設い六度十到の妙行無しと雖も、只だ持名称念の勤を以て、以て去行と為ば、水月の昇降決定して顕現すべし。是れ則ち別願の感応なり。焉んぞ思議すべけん。

又た迦才『浄土論』に二道の修行を励まさんと欲して、先ず三学の有無を測量すべきの義を釈して云く、『観経』に云く「若し能く至心に阿弥陀仏を念ずれば、一一の念の中に八十億劫の生死の重罪を滅す」と。今既に時に約し根に約するに、行者定慧の分無き者は唯だ須らく専ら阿弥陀仏を念じて浄土に生せんと求むべし。此を要路と為すなり。若し自ら定慧の分有りと知らば、則ち此方に於いて道を修し無上菩提を求めよ。若し自ら定慧の分無しと知らば、則ち須らく浄土の行を修し浄土の中に就きて無上菩提を求むべし。故に『智度論』に云く「行者阿毘跋致を求むるに二種に道有り、一には難行道、二には易行道、水陸両路の如し。此方にて道を修すれば則ち難く猶し陸路のごとし。浄土に生じて道を修するは則ち易し、猶し水路のごとし。已上。

又た慧浄師の『阿弥陀経義述』に云く、

一たび彼土に生ずれば横に五道を截り三界を超出して不退転に至る。初僧祇万劫の修行に当たれり。

『十住毘婆沙論』に云く「修道に二有り。一には難行、二には易行。此土の修道を名づけて難行といひ、西方の修道を名づけて易行という。あしなえ跋たる人の陸路を歩行するに即ち苦しく、跋たる人の水路に乗船するに即ち樂しきが如し。

又た大智律師の『観経義疏』に云く、

第二摂教分齊に三有り。初には二土立教の純雜を明かし、二いは大小漸頓を弁じ、三には了不了義を

簡ぶ。初に二土立教純雜を明かすに、釈迦一化所説の經教に大途二有り。一には娑婆入道の教觀、二には淨土往生の教觀なり。初の中に娑婆の五濁には惑業に、重輕あり、根性に差別あり。機に在りて既に雜なれば教も亦た純ならず。故に大小科殊に、偏円轍異なること有り。經論の宗師、古今の判教互いに不同ありて迭に相い廢立す。廣くは他文に在り。備に叙ぶべからず。

戒度『正觀記』に之れを受けて曰く、

問う、疏主兩土の教法に純雜の異有ることを区分するは、前古にも未だ聞かず。達士は適從せざる無し。小智は尚お輕誚を生ず。典拠有りとや為ん、臆裁より出ずるとや為ん。試みに請う、申べ通じて永く疑惑を祛けよ。答う、疏を造り、經を通じ、言を立てて教を判ずること苟くも正量無くんば、安ぞ敢て心を師とせん。独り功無きのみにあらず。反りて伊の戚を貽す。但だ義、群編に蘊して、名、今疏に出でたり。無文有義は智者之れを用う。今、為に委しく陳べん。庶幾くは一たび悟れ。故に天台の『十疑論』に自力他力を明かせり。自力とは此土の修道なり。卒に未だ成ずることを得ず。他力とは若し弥陀を信ずれば大悲願力摂取して捨てず。即ち往生を得るなり。復た『十住婆沙論』の難易二道を引きて云く、「難行道とは此の五濁惡世に在りて無量の仏の所にて菩提の道を求む。是れを甚難と為す。云々。易行道とは謂く、仏語を信じて念仏三昧を修すれば仏力摂持して即ち往生を得。云々。」準知するに、自力難行道は此土入道の教にあらずや。他力易行道は淨土入道の教にあらずや。又た善導の『玄義』の如きは專雜二修を以て兩土の進道の不同を分てり。瑛師の『修証義』の中には、乃ち此方の破惑証真と西方淨土に生ぜんと求むるとの説有り。疏主、深く仏意を得、仰ぎて先賢を則とす。故に茲の高判独り古今に抜く。四海をして咸く規とし、万載不易ならしむべし。上。

請い問う。曰く、三句とは『金剛般若』に云く、

如来、一切の法は皆な是れ仏法なりと説きたまう。須菩提、言う所の一切法とは即ち一切の法に非ず。是の故に一切法と名づく^上。

六祖能大師之れに註して曰く、

能く諸法に於て心に取捨無く、亦た能所無ければ熾然として一切法を建立すれども而も心常に空寂なり。故に知んぬ。一切法は皆な是れ仏法なることを。迷者の一切法に貪著して、以て仏法なりと爲ることを恐れたまいて、此の病を遣らんが爲に故らに即ち一切法に非ずと言うなり。心に能所無く、寂にして常に照せば定慧齊しく行じ、体用一致なり。是の故に一切法と名づくといえり^上。

又同経に云く、「言う所の善法とは、如来善法に非ずと説きたまう。是れを善法と名づく^上」^上と。同註に云く、

一切の善法を修するに果報を希望せば即ち善法に非ず。六度万行熾然として俱に作せども、心に報を望まず。是れを善法と名づく^上と。

又同経に曰く「如来、諸相具足と説きたまうは即ち具足に非ず。是れを諸相具足と名づく^上」^上と。同註に云く、

如来とは即ち無相法身是れなり。肉眼の所見に非ず。慧眼乃ち能く之れを見る。慧眼未だ具足を明らめず。我人等の相を生じて以て三十二相を觀じて如来と爲るは、即ち名づけて具足と爲さず。慧眼明徹にして我人等の相生ぜず。正智の光明常に照らす。是れを諸相具足と名づく。三毒未だ泯^{ほろぼ}さずして、如来の真身を見ると言わば、固^{まこと}に此の理^{ことわり}無し。縦い能く見る者も祇^ただ是れ化身なり。真實無相の法身には非ず^上と。

夫れ『金剛般若』の一部始終、皆な此の如く三句法門を説きて、以て一切衆生の迷執を遣撥す。学者致

迷すること勿れ。抑^{そもそも}仁者、正しく是れ第一句の域内に居れり。然而又た頻りに第三句の方外に出でたりと訕^うじること、若しは夫れ大妄語か。若しは又た増上慢か。二つ俱に言うに足らざるのみ。於怖^{おそ}しきかな。三逆の大授^いが再來せるか。四禪苾芻^いが未だ死せざるか。其れ如何。慎むべし、慎むべし。且く応理円成^い宗に依りて之れを言わば、智純觀達すれば煩惱即ち息す。是れを名づけて寂と為す。煩惱若し寂すれば、妙智爰に顕るるを即ち菩提と言ふなり。全く煩惱の体即ち菩提なりと謂うには非ず。此の義大いに性宗^いに明かす所の惑智一体の義には異なり。若し又た之れに依りて之れを觀れば、難者の所存^{いふ} 弥^{いふ}邪見の深坑に墮すのみ。

次に「教道は断と云い証道は断とせず」と言うは、凡そ断道の次第に於て大いに分ちて二有り。一には曰く対治断、二には曰く体達断なり。対治断は是れ偏に三行者の所用なり。所謂る実に煩惱の迷闇を断破して、以て智慧の光用^いを耀かす。体達断は廻ち円頓行人の所用なり。所謂る迷悟相即智惑体一と体達して、煩惱の体性を失せざるなり。然れば則ち円融実教の意は、是れ体達断にして対治断に非ずと。而して「教道は断と云い証道は断とせず」とは言うなり。学者混淆すること莫れ。問者之れを聞きて忽ち翻邪向正するのみ。

抑^{そもそも}若し復た人有りて念仏を捨てて勤修せざるは、貧人の衣裏の明珠を忘れ、力士の額上の宝珠を忘れたるが如し。若し又た人有りて本願に帰して尊号を持つは、窮女の最上の勝金を得、渴者の清淨の冷水に値えるに似たり。行者自量せよ。又た聖道修行を致すの人は、無輓^いの車に乗じて去るが如し。浄土往生を求むるの彙^いいは、牢副^いの輅に乗じて往くに似たり。二車運轉の優劣其れ何如ぞや。

問て曰く、縦い三字無分の衆生と雖も、若し六字尊号の妙行を持てば、必ず苦海の愛波を超えて、速やかに樂邦の彼岸に至るといふこと、諦らかに其の義理を聴き、諦らかに其の文証を聞きつ。行体に於て最

も然らんか。但し若しは厭欣の用心、若しは起行の意業、夫の禹王⁽¹⁶⁾、洪波を治せしの思い、燕丹⁽¹⁷⁾、白鷗⁽¹⁸⁾を得たる志の若くに匪ざる自りは往生を得べからずとならば、我れ等、庸輩⁽¹⁹⁾散漫濁乱の異生、定んで西方即詣⁽²⁰⁾の缺⁽²¹⁾を絶たん者か、何如ん。

答えて曰く、夫れ持名の行者、二種の用心、縦い君子の交わりの似如に相い似て醇⁽²²⁾からずと雖も、直ちに西刹を求め余の九域を捨てて、独り称名を勤めて万行に涉らずんば、籠鳥騰空の時、聖衆来迎の靈粧⁽²³⁾を拝し、胞胎逃逝⁽²⁴⁾の刻、簫瑟琴筑⁽²⁵⁾の音楽を聞かんこと必せり。仁者⁽²⁶⁾聞かざるや、彼の裴旻⁽²⁷⁾が真虎に逢い、葉公⁽²⁸⁾が真竜を感じしことを。是れ其の二子は便ち仮を行じて而も真を得たるの彙⁽²⁹⁾なり。若し爾らば、行者等、用心の浅薄に泥じて、順次の往生を疑うこと莫れ。若し修道の人有りて、念仏を捨てて余行を勤めんと欲せば、奚んぞ金鐐⁽³⁰⁾を以て鎗鐐⁽³¹⁾に易え、錦欄⁽³²⁾を以て褐⁽³³⁾に易うるに異ならんや。智人、自ら商量すべし。噫乎、夷齊⁽³⁴⁾が大賢なりしも、猶お獄卒の為に打たれ、孟鳥⁽³⁵⁾が風のごとく走りしも、又た阿防⁽³⁶⁾の為に追われたり。夫れ尊号の利劍は十纏⁽³⁷⁾の太索⁽³⁸⁾を截るべく、念仏の洪波は七支⁽³⁹⁾の塵垢を洗うべし。南無阿弥陀仏。

浄土十勝箋節論卷上

乾上終

(1) 飛錫『念仏三昧宝王論』〔浄全〕六・七四〇下。

(2) 廢官：父のおかげによって得る官位。

(3) 三学難行之域闢：域闢は門で固く閉ざされた地域のこと。三学を修める難行で覺りをもとめようとする仏教の教え（聖道門）

を例えた語。

- (4) 枰瓢捨擲：『莊子』「逍遙遊篇」にある瓢筆問答、擲木問答のこと。一見大きすぎて役に立たない瓢筆や擲木にも、捉え方によつて素晴らしい価値があるとする無用の用に関する話。
- (5) 成玄英『莊子注疏』、『莊子』の註釈書。原典未詳。
- (6) 曇鸞『往生論註』（『浄全』一・二四九上）。
- (7) 『無量寿経』（『浄全』一・一一）。
- (8) 畏影惡迹く処陰処静…心配ごとにとらわれて心の平静を得られない時は、静かに過ごすべきであるということ。『莊子』「漁父篇」に、自らの影や足跡に怯えて、それから逃れようとして走り続けたものが、ついに力尽きて死んでしまったという故事がある。
- (9) 六賊：眼耳鼻舌身意の六根のこと。
- (10) 八家大乘：真言宗、仏心宗（禪宗）、天台宗、華嚴宗、三論宗、法相宗、地論宗、摂論宗の八家のこと。『選択集』ではこれらの八家を聖道門に括めている。
- (11) 薛荔：餓鬼のこと。サンスクリット語 *prīṭa* の音写語。「薛荔多」ともいう。
- (12) 達池：阿耨達池の略称で、古代インドの世界観では、ヒマラヤ山の北側にあるとされる湖のこと。この湖に辿り着くには特別な能力が必要とされる。
- (13) 芬芳：よい香りのこと。
- (14) 殿最：優劣のこと。「殿」はしんがり、「最」は軍のさきがけの意。
- (15) 三密十乘：真言宗の三密の行法と、天台宗の十乗観法のこと。
- (16) 巨瀛：広い海のこと。
- (17) 昇獲：夏王朝の時、寒泥の子昇が多力で能く陸地に舟を推し動かしたという故事がある。低劣な人のこと。「昇」はあなどる、おごる、「獲」は身分の低い女性の意。
- (18) 一簣之山く欲登九仞…九仞の高い山を築くのに、最後の一杯の土を欠いても完成しないこと。長い努力の末、事が今にも成就しようとしても、最後のわずかな過失のために失敗することのたとえ。
- (19) 甕：水や酒を入れる器。
- (20) 棹：柱の上に横木を渡し、その一端に石などの重しを取りつけた井戸水を汲み上げる仕掛けのこと。

- (21) 蔬：草本類のこと。
- (22) 俱博：不空訳『金剛頂瑜伽最勝秘密成仏随求即得神変加持成就陀羅尼儀軌』や平康頼の撰述と伝えられる『宝物集』に、一生悪業ばかりを重ねて地獄に堕した俱博という婆羅門が随求陀羅尼の真言の功德によって救われたという説話が収録されている。
- (23) 二失：天台宗の最澄と論争した法相宗の徳一が、即身成仏への疑義として挙げた行不具失と欠慈悲失のこと。
- (24) 断蛇覚之覺之実見：『撰大乘論』等に説かれる、いわゆる蛇繩麻の比喩のこと。唯識説の三性説について、「蛇」と思い込むのが迷いの見方である遍計所執性、「繩」と気づくのが依他起性、「麻」と見抜くのが悟りの見方である円成実性とあり、蛇から麻へ段階的に悟入してゆくことを説く。なお、真諦訳『撰大乘論』は「繩」の語を「藤」とする。
- (25) 戒度『靈芝觀經疏正觀記』（『浄全』五・四三六上）。
- (26) 黼黻：黼も黻もともに模様・名称。黼は斧の形を白黒交互にぬいとりした模様。黻は黒青交互に「己」の字が背いた形にぬいとりした模様。
- (27) 梁・昭明太子編『文選』序文。
- (28) 賁鼓：大きな鼓。
- (29) 竜笛：雅楽で使われる管楽器のひとつ。
- (30) 六大四曼：六大とは地水火風空識の六つで衆生を構成する要素をいう。四曼とは四種曼荼羅（大曼荼羅、三昧耶曼荼羅、法曼荼羅、羯磨曼荼羅）のこと（『綜佛年報』三三・一〇七頁・註二）。
- (31) 三妄五住：三妄とは我執、法執、無明をいい、五住とは五住地惑ごじゅうぢわくの略であり、衆生を三界に執着させる煩悩すべてをいう。
- (32) 荷：蓮のこと。
- (33) 服餌：道教の方術のひとつ。薬物・食物の摂取による養生方法。
- (34) 空海『秘藏宝鑑』（『正蔵』七七・三六八上中）。
- (35) 五逆八重：五逆は殺母、殺父、殺聖者、出仏身血、破和合僧のこと。八重は姪戒、盜戒、殺人戒、大妄語戒に比丘尼戒の四波羅夷を加えたもの。
- (36) 善無畏・一行訳『大日經』（『正蔵』一八・一下）。
- (37) 一行『大日經疏』（『正蔵』三九・五八七中）。
- (38) 一行『大日經疏』（『正蔵』三九・五七九下）。
- (39) 空海『般若心経秘鍵』（『正蔵』五七・一一上）。

- (40) 太早…太早計^{たいさうけい}のこと。はやまり過ぎた考え、はや合点の意。
- (41) 四依大聖…四依とは依りどころとするべき四つの事柄。法四依、行四依、人四依の別がある。ここでは人四依を指す。
- (42) 五位…菩薩が仏に至るまでの修行の五段階、資量位、加行位、通達位、修習位、究竟位のこと。
- (43) 智顗『摩訶止観』(『正蔵』四六・四九上)。
- (44) 盲跛…目と足が不自由なこと。
- (45) 瞽瞍…目が見えない状態で走るさま。あるいは目が見えず蹟くさま。
- (46) 湛然『止観輔行伝弘決』(『正蔵』四六・二八〇中〜下)。
- (47) 湛然『法華玄義釈籤』(『正蔵』三三・八二九下)。
- (48) 羅什訳『金剛般若経』(『正蔵』八・七四九上)。
- (49) 道川『金剛経註』(『正統蔵』二四・五三八下)。
- (50) 垢染…けがれに染まること。
- (51) 道川『金剛経註』(『正統蔵』二四・五五〇上)。
- (52) 能所…認識の主体と客体。仏教では一般に主客二分のあり方を迷いとして批判する。
- (53) 道川『金剛経註』(『正蔵統』二四・五五四上)。
- (54) 印可…印信許可、または印定許可の略。仏が弟子の理解を承認すること。
- (55) 道川『金剛経註』(『正蔵統』二四・五五五上)。
- (56) 道川『金剛経註』(『正蔵統』二四・五四三中)。
- (57) 無所得…心のなかで執着や分別をしないこと。主観と客観の区別のないこと。何ものにもとられない境地。
- (58) 牟子『理惑論』の引用か。本文は僧祐『弘明集』(『正蔵』五二・五上)に収録される。
- (59) 六即…天台宗において、菩薩の修行過程を六つの段階(理即、名字即、観行即、相似即、分身即、究竟即)に分けたもの。
- (60) 七位…七賢位のこと。聖者の位(見道)に入る前の三賢位(五停心観、別相念住、総相念住)と四善根位(煖法、頂法、忍法、世第一法)を合わせたもの。
- (61) 龍猛造・不空訳『金剛頂瑜伽中発阿耨多羅三藐三菩提心論』(『正蔵』三二・五七二下〜五七四中)。
- (62) 五相成身…五法成身、または五転成身ともいう。密教において、行者が五相(通達菩提心、修菩提心、成金剛心、証金剛身、仏身圓滿)の観行を修して大日如来の身を成就すること。

- (63) 勝義行願三摩地：密教における三種の菩提心。真理を觀じて現す勝義菩提心、行を修し願を發す行願菩提心、三密の行を修して大日如来を現証する三摩地菩提心を指す。
- (64) 三祇：三大阿僧祇劫の略。菩薩が修行して仏になるまでの時間。
- (65) 衢：大きな道のこと。
- (66) 安心僻越万行徒設：湛然『止観輔行伝弘決』（『正藏』四六・一六七上）に、「発心僻越万行徒施」とある。
- (67) 勤修毘盧：那之境智：毘盧の大方は密教の修行を指し、遮那の境智は天台の修行を指す。空海『秘藏宝鑰』（『正藏』七七・三六三下）に、「第八如実一道心一如本淨境智俱融知此心性号曰遮那」とある。ここでは、この心性（十住心の第八如実一道心または一道無為心）を知るものを遮那と号すとされている。
- (68) 因中说果：原因の上に仮に結果の名を与えて説くこと。それに対して、結果の上に仮に原因の名を与えて説くのを果中说因という。
- (69) 曇無讖訳『涅槃經』（『正藏』一二・五二四中）。
- (70) 陰界諸入：五蘊・十八界・十二処（入）の略称。
- (71) 大猷：大きな道のこと。
- (72) 撥却：はらいすてること。
- (73) 空海『般若心経秘鍵』（『正藏』五七・一一上）。
- (74) 如実知自心：十住心の第八一道無為心に同じ、ここでは天台の教えのことを意味する。
- (75) 知一切法皆是佛法：『摩訶止観』（『正藏』四六・一〇中）。
- (76) 智顗『法華文句』（『正藏』三四・二中）。
- (77) 服膺：心にとどめて忘れないこと。
- (78) 五悔：金剛界法を修する時に誦誦する偈頌。普賢菩薩の十大願を帰命、懺悔、隨喜、勸請、廻向の五つにおさめる。天台宗では、法華三昧を修するものが行う懺悔、勸請、隨喜、廻向、發願の五種の懺悔法。
- (79) 金剛智訳『金剛頂瑜伽中略出念誦經』（『正藏』一八・二五〇上中）。
- (80) 出典未詳。『金剛頂大教王經私記』（『正藏』六一・三二二中）に同文あり。
- (81) 『諸仏境界撰真実經』（『正藏』一八・二七六下）。
- (82) 五種三昧：一刹那三昧、二微塵三昧、三白縷三昧、四隱顯三昧、五安住三昧のこと。

- (83) 阿遮多擊之脫喝：不動明王左眼を閉じて、右眼を開いて睨む顔のこと。左眼を閉じるのは、生死迷妄の世界を表し、右眼で睨みつけるのは衆生の惡業煩惱を断除することを表す。睨は睨のことか。
- (84) 『妙法蓮華經』(『正藏』九・八上)中。
- (85) 『妙法蓮華經』(『正藏』九・三九上)。
- (86) 『金剛經註』(『正統藏』二四・五三九下)。
- (87) 『菩薩本業瓔珞經』(『正藏』二四・一〇一八下)一〇一九上)。
- (88) 無明藏：すべての苦をもたらす因である無明を藏にたとえた語。
- (89) 縛解：縛とは煩惱を指す。すなわち、煩惱と解脱のこと。
- (90) 六味：苦、酸、甘、辛、鹹、淡の六つの味のこと。
- (91) 泔沙王：ビンビサーラ王のこと。
- (92) 三受：苦しみの感覺である苦受、快適の感覺である樂受、快でも不快でもない感覺である捨受の三種の感受作用のこと。
- (93) 三苦：好ましくない対象から感じる苦しみである苦苦、世の移り変わりから感じる苦しみである行苦、好ましいものが壊れることから感じる苦しみである壞苦の三種の苦のこと。
- (94) 結使：衆生を迷いの世界に結びつける煩惱のこと。
- (95) 『賢愚經』(『正藏』四・三五〇中)。
- (96) 空海『秘藏宝鑰』(『正藏』七七・三六八中)。
- (97) 法然『無量壽經釋』(『昭法全』六八)。
- (98) 三惑同断：三惑(見思惑、塵沙惑、無明惑)が同じであること。
- (99) 元品能治：もつとも根源的な無明(元品の無明)から悟りに至らしめること。
- (100) 因人果上：因人は因位にある人、まだ仏にならない修行者のこと。果上は悟りの境地のこと。
- (101) 出典未詳。円仁『金剛頂大教王經疏』(『正藏』六一・四九中)に同文あり。
- (102) 出典未詳。慧能『金剛經解義』(『正統藏』二四・五一七中)に同文あり。
- (103) 鑿鑿：「鑿」はたがね、「鑿」はのみのこと。
- (104) 烹鍊：恐らく「烹煉」。煎じる、煮出すこと。
- (105) 出典未詳。慧能『金剛經解義』(『正統藏』二四・五二三中)に同文あり。

- (106) 六塵：眼耳鼻舌身意の六境のこと。
- (107) 羅什訳『金剛般若經』（『正藏』八・七四九上）。
- (108) 道川『金剛經註』（『正統』二四・五三九下）。
- (109) 族姓：富裕で権勢のある家柄に生まれた者。
- (110) 道川『金剛經註』（『正統藏』二四・五四二中）。
- (111) 法眼：五眼の一つで諸法を観察する智慧の眼のこと。
- (112) 羅什訳『金剛般若經』（『正藏』八・七五〇上）、菩提流支訳『金剛般若經』（『正藏』八・七五四中）。
- (113) 道川『金剛經註』（『正統藏』二四・五四八中）。
- (114) 道川『金剛經註』（『正統藏』二四・五四八下）。
- (115) 空海『十住心論』（『正藏』七七・三〇三下）。
- (116) 麟角：麒麟の角のこと。きわめてまれな物事のたとえ。
- (117) 牛毛：牛の毛のこと。きわめて多い物事のたとえ。
- (118) 雷同：自分の考えを持たず、他人の意見にすぐに同意してしまうこと。
- (119) 智顗『摩訶止観』（『正藏』四六・一八上〜一九中）。
- (120) 六蔽：六波羅蜜を行ずるのに障りとなる慳貪、破壊、瞋恚、懈怠、散乱、愚痴のこと。
- (121) 犬戎：古代、中国の北西方に住んでいた異民族。周の幽王は、この犬戎に攻められて、紀元前七七一年に都を洛陽に移した。
- (122) 不絶如縷：縷は綫の意。一本の糸のすじほどのこと。国が絶えずにわずかに残ったことを表す。
- (123) 阮籍：竹林の七賢の一人で老荘の学者。俗世間を厭い、礼法を無視した。白眼、青眼の故事で有名。
- (124) 蓬頭散帶：蓬（よもぎ）のようにぼうぼうに伸びた頭で、着物が乱れているだらしない様。
- (125) 擗節兢持：厳格に礼節を重んじること。
- (126) 宇文邕：武帝のこと。北周第三代皇帝。仏教弾圧をしたことで知られる。
- (127) 元嵩：南北朝時代の北周の人。初め僧で、のち還俗。武帝に仏教が治国に害があることを説き、廃仏を起こさせるきっかけをなした。
- (128) 西施：春秋時代の越の美女。呉に敗れた越王勾践から呉王夫差に献上され、寵愛を受けた。夫差が彼女の美しさにおぼれて、呉に呉は越に滅ぼされた。

- (129) 嗔呻：顔をしかめてうめくこと。
- (130) 譬如西施：飛者高逝：『莊子』「天運篇」にある故事の取意。形を真似るだけではなく、根本を理解すべきの意。
- (131) 黄竜湯：漢方薬の一種。大黃湯とも言う。
- (132) 夷嶮兩路：平らな道と険しい道のこと。
- (133) 蹈躡：踏み越えること。
- (134) 穿踰：壁を壊しのり越えること。
- (135) 湛然『止観輔行伝弘決』（『正蔵』四六・二一〇上）。
- (136) 淮河：中国の川。長さは長江、黄河に次ぐ。黄河と長江の間を東西に流れており、この川が華北と華南の境界線ともされる。
- (137) 四運：四運心の略。人の観念が起る四つの過程（未念、欲念、正念、念已）のこと。
- (138) 阿梨：『中阿含經』五四・「大品阿梨吒經」（『正蔵』一・七六三上〜七六六中）のこと。
- (139) 源信『往生要集』（『正蔵』八四・四九中〜下）。
- (140) 惡取空：空の意味を誤って理解して、執着すること。
- (141) 反質：質問に対して逆に問い返すこと。
- (142) 源信『往生要集』（『正蔵』八四・六四下〜六五上）。
- (143) 大僻：重い刑罰のこと。
- (144) 顧視：かえりみること。
- (145) 龜毛兎角：この世に存在しない物事のたとえ。
- (146) 体性：実体と本性のこと。
- (147) 庸輩：凡庸なやからのこと。
- (148) 法然『選択集』（『正蔵』八三・五下〜六上、『浄土宗聖典』三・二六）。
- (149) 六度十到：六度は六波羅蜜、十到は十到彼岸、つまり十波羅蜜を指す。
- (150) 迦才『浄土論』（『浄全』六・六六四下〜九、『正蔵』四七・一〇〇下〜一〇一上）。
- (151) 慧浄師『阿弥陀經義述』（『正蔵』三七・三〇九上）。
- (152) 元照『観無量寿經義疏』（『正蔵』三七・二七九下〜二八〇上）。
- (153) 戒度『正観記』（『浄全』五・四四一上〜下）。

- (154) 『金剛般若経』（『正蔵』八・七五一中、七五五中）。
- (155) 慧能『金剛経解義』（『正統蔵』二四・五二八中）。
- (156) 『金剛般若経』（『正蔵』八・七五六上）。
- (157) 慧能『金剛経解義』（『正統蔵』二四・五三〇中）。
- (158) 『金剛般若経』（『正蔵』八・七五一下）。
- (159) 慧能『金剛経解義』（『正統蔵』二四・五二九下）。
- (160) 旬：大きな声でさわぐこと、わめくこと。
- (161) 大：頭注に「天」の誤りかとある。
- (162) 応理円成宗：相宗のこと。現象的な変化差別相対のすがたを課題の中心とする宗旨。具体的には俱舍宗や法相宗など。
- (163) 性宗：不変平等絶対真実の本体や道理を課題の中心とする宗旨。具体的には華嚴宗や三論宗など。
- (164) 湛然『止観輔行伝弘決』（『正蔵』四六・二四八中）。
- (165) 用：頭注に「明」の誤りかとある。
- (166) 無輶之車：油を注していない車のこと。進むためには困難な乗り物として、ここでは聖道修行の例えに用いられている。
- (167) 牢副之輅：牢固にして立派な車のこと。困難なく進める乗り物として、ここでは往生浄土を求める行の例えに用いられている。
- (168) 禹王：中国古代の伝説的な帝（紀元前二〇七〇年頃）で夏朝の創始者。
- (169) 燕丹：燕の太子である丹（紀元前二二六年）のことで、古代中国の戦国時代末期の燕の王族。
- (170) 白鷄：白いカラスのこと。燕丹が秦王（後の始皇帝）に人質として捕らわれたときに、故郷に残した母に会いたいと帰国の願いを出したところ、秦王はカラスの頭が白くなり、馬に角が生えたら、故国に帰してやろうと嘲笑ったが、燕丹の必死の祈りが通じて、そのありえないはずのことが起こり、やむなく燕丹を故国に帰したという故事がある。
- (171) 庸輩：平凡なやからのこと。
- (172) 籠鳥騰空：籠に入られて自由を奪われていた鳥が、空に放たれてのぼってゆくこと。
- (173) 胞胎逃逝：胞胎は胎児をおおう肉膜。四生のうちの胎生から逃れ、輪廻を脱すること。
- (174) 簫瑟琴筑：簫は竹管を使った気鳴楽器、瑟は多数の弦をもつ大型の楽器、琴は中国宮廷内の祭祀にまつわる高貴かつ限られた文人しか演奏でできなかった七弦を張った楽器、筑は竹製の胴に五弦を張った楽器のこと。
- (175) 裴旻：盛唐の頃の武官で剣舞の名手。腕試しに虎退治を行ったが、本物の虎に出会って立ちすくんでしまい、二度と狩獵をし

なかったという故事がある。

(176) 葉公：楚の重臣。竜を好んだが口先だけの愛好であつて、本物の竜に出会つてみると恐れおののいてしまったという葉公好竜なる故事がある。

(177) 金鏐：金と銀（しろがね）のこと。

(178) 鍮鐵：銅と錫のこと。

(179) 錦欄：美しい衣のこと。

(180) 褐：そまつな着物のこと。

(181) 夷齊：伯夷と叔齊のこと。殷代末期の孤竹国の王子の兄弟で高名な隱者。儒教では聖人とされる。

(182) 孟鳥：大きく猛々しい鳥のこと。

(183) 阿防：地獄の獄卒のことで、牛の頭に、胴と手は人、脚は牛に似ている。

(184) 十纏：十種の煩惱のこと。ここでは十惡を指すか。

(185) 太索：太い縄のこと。

(186) 七支：身業の三つの煩惱（殺生・偷盜・邪婬）と、口業の四つの煩惱（妄言・綺言・惡口・兩舌）のこと。